UNITIA 神託の使徒×終焉の女神　―BEYOND THAT―

トブト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――ある日、世界はひとつになった。

魔法文明が支える幻想と神秘の世界「ミストレア」。

科学が生み出した叡智と技術の世界「ネオラント」。

かつて別々に存在していたふたつの世界が突如、混じり、融合する。

「クロスワールド」と称されたその世界で共存を強いられ、困惑の中を生きる人々。

異なる価値観が衝突を生む中、新たな脅威が世界を苛んでいく――――。

※２０２０年３月３１日にサービスが終了した『ＵＮＩＴＩＡ　神託の使徒×終焉の

女神』の二次創作です。色々至らないところもありますがどうか温かい目で見守ってください。

目次

〜Their story so far〜 これまでの道筋 ―――― 1
〜Quiet〜 彼らの日常 その1 7
〜Quiet〜 彼らの日常 その2 15
〜Quiet〜 彼らの日常 その3 24
〜Quiet〜 彼らの日常 その4 35
〜Quiet〜 彼らの日常 その5 44
〜Quiet〜 彼らの日常 その6 49
〜Prologue〜 動き始める物語 その1 ―――― 69
〜Prologue〜 動き始める物語 その2 ―――― 75
〜Prologue〜 動き始める物語 その3 ―――― 79
〜Prologue〜 動き始める物語 その4 ―――― 87
〜balmnasbtlaKarma〜 前兆 その1 ―――― 94
〜balmnasbtlaKarma

〜balmnasbt laKarma〜前兆　その2　101
〜balmnasbt laKarma〜前兆　その3　109
〜balmnasbt laKarma〜前兆　その4　122
〜balmnasbt laKarma〜進展　その1　138
〜balmnasbt laKarma〜進展　その2　144
〜Symptom〜揺れる水面　その1　151
〜Symptom〜揺れる水面　その2　159
〜Symptom〜揺れる水面　その3　166

～Ｔｈｅｉｒ ｓｔｏｒｙ ｓｏ ｆａｒ～ これまでの道筋

１

種蒔く光　静寂なる秩序の園を望郷す
花咲く地　豊穣たる楽土の園を追憶す
理は交叉し　七災の御柱　天地を穿つ
星霜の御使い　其は創世の流星たるや
三位の御使い　其は救世の聖翅なるや
我が終焉　至に目見えしは　黄昏が為

２

――ある日、世界はひとつになった。

魔法文明が支える幻想と神秘の世界「ミストレア」。
科学が生み出した叡智と技術の世界「ネオラント」。
かつて別々に存在していたふたつの世界が突如、混じり、融合する。
「クロスワールド」と称されたその世界で共存を強いられ、困惑の中を生きる人々。
異なる価値観が衝突を生む中、新たな脅威が世界を苛んでいく――――。

3

時は流れ、現在。
混じり合ったふたつの世界間で和平が結ばれ、平穏に暮らしていたリアンの元に「世界の謎を解き明かしたい」とひとりの少女が訪れたのが全ての始まりだった。
ネオラントから来たマキアはミストレアいちの冒険家であるドラサール邸に赴く。そこで出会ったのは娘のリュインと義理の息子のリアン。【虹】について何か知っていることはないかを話しているときにリアンたちの村で虹災が発生。人型のダストも現れリアンは命を落としかけるがそこに突如として現れた謎の少女テラに命を救われる。
その後【虹】の秘密を解き明かす［虹の調査団］を結成。活動を認めてもらうため一行はミストレアいち大国であるキルシュバウム王国で女王との謁見と承認をお願いす

るも守護騎士団に断られる。そんな最中虹災が発生。調査団は問題解決に奔走し、無事その力を認められる事となる。

次にネオラントでの活動も認めてもらうために一行はアステル連邦の防衛省へ訪れる。その道中でリオノーラに出会う。マキアは活動を認めてもらおうと保安省のメーヴィス長官の元へ訪れるも相手にされず突き返される。すると街で虹災が発生。マキアだけが残り調査団は出撃。一対一でメーヴィスと対峙するマキアは過去の自分と決別、新たな道に進むことを決意し、メーヴィスに向かってその覚悟を伝え、合流する。

そして調査団はリオノーラの過去を知る。『悪魔の子』。生まれつき特異な能力を持ったことで生まれた弊害はリオノーラだけでなく彼女の故郷タウロにまで及んでいた。その解決のためにタウロに訪れた一行は異形なオーラを放つミュータント討伐へと動くもリュインが反対。対立の末、一人行動に走る。その後合流した調査団はミュータントが暴れる原因となった【エニグマイト】を取り除くことに成功。討伐せずに解決へ向かうのだった。

［虹の調査団］として活動が認められ始めた頃、バウム王国から護衛の任務が舞い込み、守護騎士数名とその長アセリアと共にニンフェアに向かう。その道中ジェイニーと遭遇。ニンフェアまで行動を共にする。その後護衛対象と合流を果たした夜、謎の影が調査団たちを襲う。謎の影の正体はジェイニーだった。彼女は情報局で悪逆の限りを

尽くした者を葬るために情報局が寄越した刺客であった。だが、そこで思わぬ事実を知らされる。調査団がジェイニーと邂逅を果たしている時、ジェイニーの目を欺くために先に出発していたアセリアは人型ダストのクリムに遭遇。護衛対象を奪われる。だがそこにジェイニーが介入したことで奪還に成功。クリムには逃げられるも目的は果たす。

護衛任務の報酬として手に入れた情報を元に調査団一行はリブラに四賢人の一人カロルと共に訪れる。そこで虹災が発生。時同じくして港の倉庫で爆発が起こる。調査団はそれぞれ解決のために二手に分かれ、一度収めることに成功する。しかし今回の虹災が不自然だったことを踏まえ、カロルの指揮の下、調査に入る。その過程で防衛省長官であるダフネから有力な情報を入手。すると二度目の虹災が発生。リオノーラを残しダスト討伐に奔走する間リオノーラはもう一人の四賢人アルドルフに出会う。すると同時に人型ダストのクリムと別の人型ダスト、デリットと会敵。そのことを知った調査団一行はカロルを一方とぶつけ、クリムを引き受ける作戦に出る。作戦は成功し無事人型ダストふたりを退けた一行たち。だが、裏では水面下に何かが動き出していた――。

リブラの爆発事件から発見された兵器の輸送経路から通称【封鎖エリアＢ３】クレーブスに侵入する調査団一行はそこで軍の非人道な行いを目撃。クレーブス民と共に対

立することになる。その戦闘中四賢人アルドルフと一応護衛のバウム王国魔術師団団長のエクレールと合流。町に籠城する。だがそこで行われた軍の浄化作戦で調査団は分断、テラが攫われる。さらに町に放たれた邪龍によりロザーナのレリックが覚醒、暴走。後にシェリーの口から語られるふたりの因縁と真実が明らかとなる。そして分断されてしまった一行はそれぞれの目的のために地下に向かう。一方、軍に捕まったテラはそこで殺されそうになっているクレーブス民を守るため自らを盾に立ちはだかっていた。しかし無情にも遂行されようとする作戦。テラにもその凶弾が迫ろうとした時、街の邪龍に異変が起きる。それと同時に【何か】との鉢合わせを懸念するダフネはその場を去る。その後軍に離反を起こしたシュレディカの扇動の下、クレーブス民の保護を目的に地下へ向かう。そこで地下の大広間にて合流を果たしていく調査団たち。クレーブス民と軍の力を借りて邪龍討伐に成功する。邪龍から取り出した【エニグマイト】を取り込んだテラはかつての旧友マーレの記憶を取り戻すも目の前にいるかつての友は記憶とはかけ離れていた。「翅を集めろ」。その言葉を残してマーレは姿を消す。全てが終わった頃に一行の元にメーヴィスとダフネが現れる。ふたりの口から語られる衝撃の事実はクレーブスの未来に光を射すもので――――。一方、今回の作戦に疑問を持っていたシュレディカはダフネ本人に話を聞こうとするも大尉に止められる。「今はその時ではない――」。その言葉を聞き、軍の闇と戦う決意をするシュレディカ。そし

て調査団も敵の正体を突き止めそして――。

～Ｑｕｉｅｔ～　彼らの日常　その１

４

「リアン、何読んでるの？」

声を掛けられたことで虹の調査団団長――リアンは意識を現実に戻す。

ブルーバード・艦内。

クレーブスの件を解決した調査団一行はロザーナを連れて一度アステル連邦まで移動を開始した。

着くやロザーナはすぐさま旅に出かけ、調査団は今後の方針を決めるために所有する小型飛行艦『ブルーバード』内で会議を行っていた。

「これまでの調査活動をまとめた日誌を見ていたんだ。何かいいヒントがないかと思って」

言われてリアンは傍に座る純白なドレスのようなワンピースに身を包む可憐な少女、リオノーラに日誌が見えるように開く。

「へー、あっ、ここってこの前あたしたちが行ったところよね！懐かし～！」

そのまま日誌を通じてふたり思い出に鼻を咲かせ始める。
「あんたたちね…」
するとそこに呆れ声が混じる。
「思い出話に耽りたいのは分かるけど今は会議中なのよ。少しは自重しなさい」
キリッとした顔つきに保安省の制服でそのラインも浮き出すようなデザインを着こなす青髪ロングの少女、マキアはため息混じりに言う。
「はーい」
「…ごめん」
むすっ、と頬杖をつく青髪制服様にふたりは謝る。
「まぁまぁ…」
その側で諌めるように話しかけているのはリアンの幼馴染にして義理の妹、冒険家である父ロザールの血を引く赤い髪の片ポニテにマントが特徴的な服装をする少女、リュイン。
そのまま話を進める。
「それで、これからの調査団の方針はどうしようか?」
「もちろん情報局に乗り込むわ」
情報局。

アステル連邦の政府直属に置かれている秘密組織。
その主な役割は諜報情報の収集で長い間暗躍し、連邦の地位を確かなものとさせる。
だがそれはあくまでも表向きなもので、裏では凄惨な実験と情報の隠匿と意図的な操作を行っており、その目的は不明。
虹の調査団は先のクレーブスの件で連邦の防衛省に情報局の者がいると考え、調査を始めようとするのだが――。
「…でも情報局ってどこにあるの？」
「……」
「ぐも」
完全な手づまり状態となっていた。
そもそも情報局はその存在そのものを秘匿とされており、元保安省のマキアでさえ知らなかった程に表舞台にその姿を出さない。
そのため現在は防衛省の調査が進むのを待つのみであるのだが――。
「でもじっとなんてしてられないわ！こっちも調査を進めるわよ！」
と、青髪制服様のいつもの熱血が炸裂したわけで。
「私知ってます。道に迷ったときや行きたい場所が分からない場合は〝おまわりさん〟に聞くといいと」

「……それで分かったら苦労しないわよ」
「バウム王国で幽閉されてるシュミットさんに聞くのはどう？」
「…難しいわね。現在彼は重要人物として守護騎士団の管轄の下で厳重にされてるから話を聞くこと自体も出来ないと思うわ」
「そもそも場所を特定出来てもすぐ乗り込むべきなの？まだ相手がどれだけいるのかも分からないのにあたしたちだけで行くのは危ないんじゃない？」
「うっ、そ、そうだけど――――」
純白ワンピースに諭される青髪制服は誤魔化すように飲み物を口の中に流し――。
「――でも、これ以上情報局の好きにはさせたくないのよ」
「……」
場に重い空気が立ち込める。
情報局はその目的は不明であれど、手段は選ばず、時には非人道的なことも厭わない。マキア含め彼ら調査団はそれを幾度も目撃し、そしてその脅威を身をもって知っている。
「…僕も」
と、調査団団長の口が開く。
「例えどんな理由があっても人々の――ミストレアとネオラントの人たちを傷つけ

て、その安全を脅かす情報局を許せない」
そしてみんなの前で立ち上がり――。
「だから僕はみんなを助けるためならば情報局とだって戦う。そのためにも」
そう言ってひとりひとりの顔を見ていく。
「改めて僕はみんなにお願いしたい。どうか僕に力を貸してくれないか」
そのまま全員に向かって頭を下げるリアン。
「…なに水臭いことを言ってるのよリーダー」
ふっ、笑いをこぼすと青髪制服は胸を張って言う。
「あたしたちは虹の調査団！虹の謎を追い、この世の全てを解き明かすのよ！君はその団長なんだからドーンと胸を張っていればいいのよ！」
「そうだよ、リアン」
側の赤ポニテも優しく微笑みかける。
「あたしたちはどんな調査や冒険だってリアンと共にいるよ。どんな時も、ずっと」
「もー、ふたりして盛り上がっちゃって」
その傍らで肩を竦めながらに純白ワンピースは言う。
「ふたりがその調子だと無茶ばっかりしそうだし。どんな無茶してもいいようにあたしもついていくわ」

「なっ、ちょっ、リオノーラ！」
「えへへ」
そのまま追いかけっこが始まり、その光景を苦笑しながら眺めるリアンの側に近づく者が。
「私もです」
全体的に前衛的な少女、テラも言葉を並べる。
「私もみんなと――あなたと一緒にいたい。だから私も一緒です」
「ぐもも！」
テラの胸に抱かれる丸っこい小動物、グモモも何かを言うようにリアンに手をばたばたとさせる。
「グモモも一緒だ！と言ってます」
「みんな…」
仲間たちの心強い言葉を感慨深く噛みしめていく。
「よし！みんな！これからも頼むよ！」
「えぇ！」
「うん！」
「もちろん！」

「はい」
「ぐも！」
全員の心がひとつに――そう感じた時だった。

ぐきゅるるるる。

今までの流れや空気を壊しかねないその場にそぐわない腹の音が鳴り響く。
「……」
沈痛な空気が満ちていく。
「マキア…」
純白ワンピースの疑念の目が青髪制服に降り注ぐ。
「ち、ちがうわよ！あたしじゃないわ！リュインかテラでしょ!?」
「あ、あたしでもないよ!?」
「私も違います」
「ぐも!?ぐもぐも！」
「グモモも違うと言ってます」
「……となると」

その場の視線がある人物のところに向けられた。
「あはは……ごめん」
音の主はリアンだった。
「……まずは腹ごしらえね」
「うん」

虹の調査団の方針が決まった。

～Ｑｕｉｅｔ～　彼らの日常　その２

5

「ごはんどこにする？」

作戦会議も一入に、調査団一行は街のチェーン店が立ち並ぶ区画に足を運んでいた。

「そうねー…ここらのものは粗方行ったことのある店ばかりだしたまには少し変わったお店とかに行ってみたいかも？」

「それ面白そう！普段は何気なく行かないところとかだと新しい発見とかあって楽しいよね！」

「私はパンが食べたいです」

「ぐもぐも！」

三人と一匹が談笑に興じるのを背後に感じながら短髪団長と青髪制服もどの店に行くかで話し合う。

「あたしはたくさん食べられるならどこでもいいわ。ふふん、腕が鳴るわね！」

「マキア…その……程々に……してくれよ？この前それで出禁くらったんだから…」

「？腕が鳴るのではなくお腹が鳴るのでは？」
「実力を発揮したいってことよ」
「なるほど。マキアはお腹がすくと腕が鳴るんですね。覚えました」
「……合ってるけど微妙にちがうかな…」
物色すがら雑談を続ける調査団一行。
「み、みなさ～ん!!」
するとその背後から一行に呼びかける声が。
「お、お、お、おいていかないでください～!!おねぇさんをひとりにしないで～!!」
そこには保安省の制服を羽織りながらも街中であるにも関わらず身体のラインがハッキリ浮き出しているパイロットスーツを身に着け、なにがとは言わないがパーカーの前が閉じない大きい原因を左右に交互に揺らしながらゆるふわウェーブのかかった髪をした柔らかいおねぇさんといった印象を持つ人物が泣きながら駆け込んでくるのが見えた。
「ちょっと、アンネマリー！早くしないと置いていくわよ！」
「マ、マ、マ、マキアさんそんな～!?待っててくださいよ～!!おねぇさんはひとりにされると心細くて死んじゃうんですから～!!」
「どこの小動物よ…」

「ぐも？」
「あんたのことじゃないわよ」
虹の調査団が保有する『ブルーバード』を操縦するパイロット、アンネマリー。
候補生時代の試験で歴代最高記録を叩きだすという異例の経歴の持ち主であるが、普段はのほほんとした性格で頼りないといった印象が目立ち、いい意味でも悪い意味でも場の空気を変える。
マキアとは軍学校時代の先輩後輩の関係でアンネマリーの方が先輩なのだがマキアには頭が上がらない様子。
「まぁまぁ、ちょっとは待っててあげようよ」
「まったく…早くしなさいよ」
小言を言いながらもしっかり待ってあげる青髪制服様。
「お、おおおお待たせしまし――きゃうっ!?」
そしてようやく一行の元に追いつく手前、なぜか何もないところで盛大につまづいた。
「危ない！」
咄嗟に声を掛けるも時すでに遅く――。
そのまま前に飛び出す形でゆるふわおねぇさんはその勢いのまま――。

ズザァッ！

地面へとダイブすることとなった。

「だ、大丈夫!?」

顔から滑るようにこけたアンネマリーを仲間たちは心配するも。

「いたたたた……だ、大丈夫です～」

と、いつもの調子の抜ける声が聞こえてひとまず安堵する。

「それに思いのほか痛くなか…」

立ち上がろうと顔を上げたところでアンネマリーは気づく。

自分の下に、短髪団長が下敷きになっていることに。

「リリリリリ、リアンさん!?」

アンネマリーが転ぶ前、咄嗟に支えようと前に出た短髪団長であったのだが走った勢いそのままでつまづいたゆるふわおねぇさんの勢いを受け止めきれず、敢え無く押し倒される形となった。

その結果、ゆるふわおねぇさんのゆるふわなものに顔を埋め、股下にはその細くも女性らしい足が入るような体勢でリアンは組み敷かれている。

「ごごごごごごめんなさい～!!す、すぐどきます――きゃっ!?」

焦ったアンネマリーはすぐさまリアンの上からどこうとするもパニックになってし

まっているからか上手く立ち上がれず、むしろその豊満な肢体をより押し付けることとなる。

「ーーーーーーーっっっ!!???」

「ちょ、ちょっと!?こんな街中で何してんのよ!?」

「ごごご誤解です～!うまく起き上がれないんですよ～!!」

「私知ってます。こういうのをラッキースｋ」

「テラ、ストップ!」

「?」

早く起き上がろうとするゆるふわおねぇさんであるが焦りはより一層ミスを引き起こしやすいように返って状況が悪くなっていく。

「むがふがごがっ!!?」

「きゃっ!?リ、リアンさん…そこは!」

「～～～～～!い・い・か・ら!早く離れなさい!」

見かねたマキアがアンネマリーの首根っこを掴み剥がすようにしてようやく解放されるふたり。

走ってきたゆるふわおねぇさんはともかく組み敷かれていた短髪団長は身体の色々な部分が当たったためかその顔を少し赤らめていた。

「ご迷惑をおかけしました…。あの、大丈夫ですか？リアンさん？」
己の行動に反省し、謝るゆるふわおねぇさんは自分の下敷きとなった短髪団長の身を案じるように詰め寄る。
「だ、大丈夫だよ。アンネマリーさんが怪我しなくてよかった」
自分の身より仲間の安否を気にかけてくれることに感激していたゆるふわおねぇさんであったが、すぐに異変に気付いた。
短髪団長が前のめりの体勢のまま動かないことに。
「リ、リアンさんどうしたんですか!?もしかしてやっぱりどこか痛めたんじゃ…!?」
「えっ、そうなのリアン!?ちょっと見せてみて！」
「っ!?」
アンネマリーの言葉を聞いて純白ワンピースの少女も心配そうに詰め寄る。
指摘を受けた短髪団長は近づいてくる仲間たちに負傷した箇所を見せないように一歩退き背中を向ける。
「だ、大丈夫だよ！本当になんともないから！」
「ウソ！やっぱりケガしたんでしょ！いいから見せて！」
人のオーラが見えるというリオノーラを相手に短髪団長の嘘はすぐに見破られ――。
「リーダー。あなたはこの団の長なんだからこれから先に何があるか分からないの

よ。負傷してるのに後で起こってからじゃ遅いのよ。ここは変に隠さずに診てもらいなさい」

「い、いやでも本当に大丈夫だから…」

青髪制服に最もらしいことを言われるもなお拒み――。

「リアン…昔あたしが怪我したのに黙ってたことに怒って言ってくれたよね？『本当は大丈夫じゃないのに心配させないように隠したその優しさがなによりもつらい』って。だからここはリオノーラに診てもらおう。ね？」

「え、えとその…あの…」

幼馴染である赤ポニテにも優しく諭され――。

「すごくパンパンに腫れてます」

そしていつのまにかテラが前に回り込んでいた。

「テ、テラ!?」

驚いたリアンは踵を返すように飛びすさり――。

ガシッ。

そして後ろから羽交い絞めにされる。

「今よ！リオノーラ！」

「うん！」

その隙に治療を開始しようとする純白ワンピース。
「えっ、ちょっ、待っ」
拘束を解こうと暴れる短髪団長であったが青髪制服のその華奢な身体のどこにそんな力があるのか一向に振りほどける様子はない。
「待って！やめ――」
「いいからおとなしくしてなさい！」
「ごめんね。すぐ終わるから我慢して――」
そこでその場の全員――通行人も含めて――が一斉にそこを見た。
短髪団長の負傷した箇所――下腹部辺りを。
「あ」
「あ」
「あ」
考えてみてほしい。
普段はそのドジっぷりが目立つアンネマリーであるがその容姿は黙っていれば魅力的かつ誘惑的なのだ。
女所帯である調査団を率いる団長であるリアンは普段は意識しないように努めているも先程のように遠慮なく密着された場合、彼女の女性らしさを否応でもなく感じ取っ

てしまう場合。
必然、男としての反応を示してしまうのも自然の摂理であるわけで――。
周囲から嫌悪と憐憫を含む視線が降り注がれる。
「リ、リアンさん…そんな街中で…」
一人なぜか照れながら顔を赤らめるゆるふわおねぇさんに対し、他三人の仲間の見る目は冷ややかなものであった。
「…えっち」
「…変態」
「…すけべ」
各々がそれぞれ相応しい烙印を押し付け。
「すごくパンパンに腫れてます」
「ぐもぐも」
最後にトドメの一言がリアンの胸に突き刺さる。
「理不尽だぁーーーーーーーっっっ!!!」
その悲痛な叫びはネオラントの蒼い空へと響き、溶けて消えるのだった。

～Ｑｕｉｅｔ～　彼らの日常　その３

6

街での珍騒動を経て。
小洒落たお店にて。
「あ、すみません。この特製パフェをふたつお願いします」
「ふーっ！ここのステーキはなかなかボリューミーで歯ごたえあったけどあたしに掛かれば即・完・食ね！」
「アンネマリー、これはなんですか？」
「あ、それはコショウと言ってこんな風に味が物足りないなーって時につか……へっくち！」
「ぐもずるる…」
「んふふ、グモモちゃんすっかりパスタが気に入ったみたいだね。…あっ！いけない。

店員さん来ちゃったからぬいぐるみのフリしてグモモちゃん！」
調査団一行は皆各々に昼時の食事を堪能としている中で。
「……」
ただ一人、短髪頭の人物だけがテーブルに突っ伏したままで窓の外の景色に物憂げに眺めていた。
「リ、リアン。ほらこのパフェすごく美味しいから一緒に食べよ。ね？」
「リ、リーダー！ここのギガ盛りスタミナステーキはなかなか挑戦のし甲斐があるわよ！リーダーも挑戦してみなさいよ！」
「リアン。この〝コショウ〟というものは人をくしゃみさせるものみたいです」
「くしゅんっ！テ、テラさん!?それ以上は…くしゅんっ！」
「…お客様。当店ではペットの持ち込みは出来ないものとなっておりまして…」
「……（ぐも）」
「（グモモちゃん喋っちゃダメ！）あ、こ、これぬいぐるみなんです！よ、よく出来てますよね！あは！あははは！」
皆が元気づけようと（後半あたり違ったが）話しかけるも物憂げな団長にはどこ吹く風で誰も振り向かせるに至らない。
原因は言わずもがな。

「……ねぇ、どうするの？」
「ど、どうするって言われても…」
「こうしたらもっと美味しくなるでしょうか？」
「はっくしゅん！テ、テラさはっくしゅん！」
「他のお客様のご迷惑になりますので…」
「はい……すみませんでした。次からは気を付けます…」
「ぐもずるる…」
しかし事態は好転するどころか混迷を極めるばかりで。
「そ、そうだ！方針！今後の調査団の方針について話しましょう！」
「それよ！リオノーラ！」
そこで思い立ったかのように純白ワンピースが手を叩いて軌道の修正に入る。
「とにかくあたしたちの現状を一度整理すると…近い未来、あたしたち虹の調査団と情報局の衝突は避けられない。情報局には『機叡アンティキティラ』っていうものすごいコンピュータを持っていてそれを使って何かをしようとしている。現在防衛省のダフネさんもそのことについて調べてくれているけどもその間にこっちも独自で調べよう…ってところよね？」
ひとしきり語り終えた純白ワンピースは確認を取るように全員の顔を見ていく。

なお、物憂げな団長の意識は未だどこか彼方に行ったままだった。
構わずリオノーラは続ける。
「それでまずは情報局の居所を探ろうってことだけど…」
しかし、そこまで言いかけたところで押し黙る。
現状、虹の調査団が把握している情報局の情報は数少ない。
『ＤＣ計画』や『機叡アンティキティラ』など重要なワードは知ってはいるが肝心の情報はなにも知らないのだ。
さらに、政府直属ということもあり情報局自体が秘匿扱いされているということもあり、その情報の一切も世に出回ることがない。
そのため調査団はいきなり出鼻を挫かれている。
調べようにも相手はその情報すら操作し、隠蔽できるのだから。
「困った時は〝おまわりさん〟に聞くと良いと…」
「テラ。このパフェ美味しいから一緒に食べよ？」
「もぐもぐ…美味しいです」
「でも情報局関連の人物に当たるのはいいと思うのよ。そうなると…」
青髪制服様はそこで思案に耽る。
シュミットは現在バウム王国にて王国騎士団管轄で厳重に幽閉されているため会う

こと自体が難しい。
レオーネは長年情報局を追っているけどあたしたちと同じでその場所までは特定に至れていない。
シェリーとロザーナはふたりとも実験室から逃げてきたと聞くがシェリーにとって恐怖でしかない記憶を無理やり思い起こさせるようなことはしたくない。ロザーナに至っては記憶まで失っている。
「あとは…」
と、そこまで言いかけたところで。
「へー！その時そんなことがあったんですねー！」
マキアがひとつひとつを精査するように思案の海を広げているところでのほほんとした明るい声がその波を途切れさせる。
見るといつの間にか短髪団長とゆるふわなおねぇさんがふたり仲良く活動日誌を開きながらなにやら談笑を繰り広げていた。
「ちょっとアンネマリー！じゃましな…」
と、真剣なところで横槍を入れられたことを咎めようとムッとする青髪制服様であったが。
「うん。それでこの時は――」

短髪団長がいつもの調子に戻っていることに気づくと、言いたいことをグッと飲み込む。

「…一体何を見ているの？」

比較的穏やかに話しかける。

「あ、マキアさん！ほらわたしって普段ブルーバードで行けるところでしかご一緒出来ないじゃないですか～。なのでリアンさんにこれまでの活動日誌を見せてもらって一緒に旅をした気分になってたんです～」

パァッ、と明るくなる笑顔で嬉しそうに語るアンネマリー。

「へぇ…今はどのあたりを読んでいるの？」

普段は操縦士として活動するアンネマリーは共に行動できないことも多い。

マキアも思い出を共有しようと一度作戦会議の席を外し、加わろうとする。

「ここだよ。ニンフェアの時。ほらあの時は護衛…」

「あぁ、確かあの時の護衛…」

そこで二人言葉を止めたかと思えば。

「「あーーーーーーーーーーっっ!!!!」」

と、まるで共鳴でも起こしたかのように二人同時に大声を上げだす。
声は店内中に響き、周囲の客はもちろん一番驚いたのは同じ席にいる仲間たちで。
「うわっ!?びっくりした!ど、どうしたのいきなり!?」
「ぐもっ!?」
「うひいっ!?な、なんですか～!?わたしまた何かしちゃいました!?」
「パフェ……最後の底にあるのは取りにくいです……」
「お客様……他のお客様のご迷惑に…」
「ごめんなさい!ごめんなさい!」
場は騒然とするも当人同士はなりふり構わない。
「いるいるいるいる!いるよ一人!情報局に詳しくて場所も知ってる一番の適任者!!」
「いたわ確かに!どうして最初に思い浮かばなかったのか不思議なくらいこれ以上無いほど情報局に詳しい人!!」
やや興奮気味に互いを指で差し合う復活した短髪団長と青髪制服様。
「ね、ねぇ…本当にどうしたの二人とも…周囲の目が痛いからそろそろ静かに…」
好奇な目に晒されていることに居心地の悪さを感じたのか縮こまる純白ワンピースに対してふたりはほぼ同時に立てた人差し指を向ける。

「いたんだよ一人！ほら思い出さないか!?ニンフェアでの護衛任務の時!!」
「え、でもシュミットさんは今バウム王国で…」
「ちがうちがう！そっちじゃないわよ！」
「あーーーーっ!!」
それまで店員に平謝りしていたリュインも突然声を上げる。
「そうだよ！いるよ！一人！あたしたち調査団の仲間で情報局のこと知ってる人！」
赤ポニテも店員そっちのけで人差し指を立てて同調する。
「あ」
そこでようやくリオノーラも思い至る。

「「「ジェイニー!!!!」」」

四人の心と声が一致した瞬間だった。
「？」
ただひとり状況についていけていないゆるふわおねぇさんを置いて四人は進展が

あったことに喜ぶ。

「ジェイニー！そうよジェイニーよ！ジェイニーなら情報局について何か知ってるはずだわ！」

「よし、それじゃあさっそくジェイニーに話を聞きに行こう！」

方針が決まり、浮かれ気味に四人が喜ぶなかで一人黙々とパフェを堪能していたテラ。

「もぐもぐ…ごくん」

そして食べ終えて一言。

「ジェイニーはどこに行けば会えますか？」

「……」

「……」
「……」
「……」
「ぐも」

ふりだしに戻った。

7

そして店は出禁となった。

～Ｑｕｉｅｔ～　彼らの日常　その４

８

ジェイニー。

強化された肉体を持ち、目にも止まらない電光の如し速さで目的を果たす凄腕の若きエージェント。

アステル連邦の情報局一員として身を置いていた彼女は法では裁けない悪を根絶するために日夜暗躍を続けている。

その手段は潜入捜査から破壊活動まで多岐に渡り、目的のためならば手段は選ばない。

虹の調査団と出会ったのはまさにその任務での時であり、調査団が護衛任務として訪れたニンフェアである。

その護衛対象を誅するべくジェイニーは調査団と戦うことになるも、そこで調査団の口から告げられた真実に驚愕した。

『ＤＣ計画』。
他者に異能の力『レリック』を移植、大量生産をするために行われた実験。
その実験内容は非人道極まりなく、今現在も情報局主導の下で実験の被害者は増え続け――。
そしてその被検体の中でもジェイニーは最高傑作であると称されていた。

9

情報局と戦うためにその情報を求める虹の調査団。
しかし相手は政府直属組織。情報の操作隠蔽はお手の物でそもそもの調査も難航していた。
だが先の見えない陰りにも一筋の光明が射し込む。
情報局について精通した者、ジェイニーならば何か有力な情報を持っているに違いない。
事態の進展があったことに一喜一憂する調査団一行。善は急げとさっそくジェイニーの元へ向かおうとした時、ある重大な問題に直面する。

誰もジェイニーの居所を知らなかった。

１０

〈リュインの調査〉
「す、すみません！虹の調査団です！人を探しているのですが…」
各々ジェイニーの行方を調べるために別行動を取ることにした調査団。
赤ポニテは冒険者気質なのか地道に足で情報を集めていた。
「……」

しかし、誰も彼女に声を掛けるどころか見向きもしない。
その理由の要因はリュインはミストレア人であり、ここがネオラントであるからだ。
遥か昔に二世界がひとつとなった頃、共存を余儀なくされた両者の間では価値観や文化の違いで度々衝突することがあった。
ついには二世界間を巻き込む大戦まで発展し、数多くの爪痕を残すことになる。
やがて和平が結ばれ、戦争は終結したが大戦で残した遺恨はあまりにも深く――。
「――――!」
一念発起とリュインは沈みかけた気持ちを起こすようにギュッと両の拳を強く握る。
このくらいでへこたれてちゃお父さんに――リアンにも笑われる!
憧れを胸に彼女はもう一度声を張る。
「すみません!虹の調査団です!人を――」
再び街行く人に声を掛け続ける。
すると。
「虹の調査団の人?」
赤ポニテに声を掛ける者が。
「は、はい。虹の調査団の者です!」
声を掛けられたことに虚を突かれたのか少し妙な口調になってしまうも相手はそん

なこと気にも留めない様子で。
「あぁ、やっぱり！実はこの前困ってたところを虹の調査団の人に助けてもらったことがあるんだよ！あの時は本当に助かった！ありがとう！」
そう言うとその人物はリュインに向かって頭を下げた。
「そ、そんな！私たちは当然のことをしたまでで――」
慌ててやめさせようと下げた頭を上げるように訴えるも――。
「今、虹の調査団って言った？」
新たに声を掛ける者が。
「は、はい。虹の調査団の――」
「あら、よかったわ！実はこの前お財布を落とした時に拾ってわざわざ走って届けてくれたことがあるのよ！あの中にはお金以外にも大事なものが入ってて本当に助かったわ～。まだちゃんとしたお礼も言えてなくてつっかえる感じが残ってたのよ～。その節はどうもありがとうございました」
そう言うとまたも頭を下げてお礼を述べられる赤ポニテ。
リュインは恐縮しながらもちゃんと感謝の念を受け取り――。
「あっ！虹の調査団のおねーちゃんだ！」
次に街の子どもが駆け寄る。

「ねーねー！今日はあのふわふわのまるまるいないの!?」
「ふ、ふわふわのまるまる？グモモちゃんのことかな…？ごめんね今日は一緒じゃないの」
申し訳なさそうに言うと子どもも少しだけ残念そうな顔をするも。
「そっかー…。この前ね！一緒にいた変な服着たおねーちゃんと遊んでくれたんだ！また一緒に遊ぼうって言っておいて！」
と、明るく無邪気な笑顔を向ける。
「うん、分かった。そう伝えておくね」
屈託なく笑う子どもの頭を撫でているとその後ろからその子の親らしき人物が。
「虹の調査団の方ですか？」
「は、はい。なにか…？」
やけに重々しい空気に思わず身構えてしまう赤ポニテ。
「いえ、実はお礼を申し上げたくて。この子は私が転勤族なばかりに友達が出来ず…いつも寂しい想いをさせていたのですが、この前調査団の方と遊んだことを楽しそうに語ってくれまして…。本当にありがとうございます」
そう言うと目に涙を滲ませながら今度は深々と頭を下げられ、赤ポニテはあたふたとし始める。

「そ、そんな！むしろこちらこそテラとグモモちゃんと遊んでくれて――」
「あ、虹の調査団の人だ」
「え、虹の調査団？」
「どこどこ？」
「なにか困ってるって？」
「この前助けてくれた――」
「大事なものを――」
「おかげさまで――」
「人を探してるって？」
「あの時はどうも――」
「この前のお礼を――」
「こっちにいるよ！」
「虹の調査団だ！」
矢継ぎ早に赤ポニテの元に集まってくる街の人たち。
そのいずれもネオラント人であるものの、感謝の念を伝えてくる者たちばかりである。
「なんか困ってるんなら力になるよ？」

「そうだ！今度は私たちが虹の調査団の力になろう！」
「あの時のお礼もしたいし！」
そして誰も彼女を邪険に扱ったりしない――ミストレア人であることを。
「……」
自分の元に人が集まっていく光景を呆然と眺めていたリュイン。
「人を探してるんだって？」
「なにか力になれますか!?」
「誰を探してるのー？」
声を掛けてくれた人たちは皆、一度調査団に依頼した者や助けてもらった者たち。
その時のお礼とばかりに誰もが彼女に積極的に力になろうとしていた。
「……」
目を伏せる。
目頭が熱くなるのを感じる。
未だ二世界間の問題は全て解決したとは言えない。
だが、虹の調査団の活動は、その存在はその垣根も超えてこうして実を結んでいる――そう実感した。
「おねーちゃん泣いてるの？どこか痛い？」

心配そうに顔を覗き込む子どもに気づき、リュインは。
「ううん！今、すっごく嬉しいの！」
雫を散らして満面の笑みを浮かべた。
そして、再度集まってくれた人たちに対して向き直る。
「すみません。虹の調査団です。人を――」
二世界間で過去に起きた大戦の遺恨はあまりにも深い。
しかし、その溝は徐々に、徐々にではあるが埋められていく。

～Ｑｕｉｅｔ～　彼らの日常　その５

ｌｌ

〈マキアの調査〉

「ここね…」

ネオラント人であり元保安省の役員務めも果たしていた青髪制服は地の利と昔の伝手、そして自分の直感を基に調査を進めていた。

「あたしの情報網と勘が正しければここにジェイニーはいるはず…」

ゴクリ、と喉を鳴らす。

ジェイニーは追われる身であれど闇に裁く義侠心に満ちた人物でもある。

そのため自らを顧みない傾向があり、死地へとその身を飛び込ませることも多い。

そんな人物を探すとなれば必然危険もまとわりついてくる。

生半可な覚悟で足を踏み入れようものならただでは済まないだろう。
だが、ここにいるのは誰だ。
自分の正義を信じ、時には独断行動もし、その結果窓際課に左遷されてもなお自分の正義を貫こうと行動し、虹の調査団設立にまで至った――正義感の塊のような人物。
青髪制服様は「危険」如きに臆したりはしない。
「さて、行きましょうか」
そして、彼女は赴く。
たったひとりで。
まるで慣れたような足取りで。
己の正義のままに――。

「残り１０分切ったーーーっ!!」
熱気がこもる戦場にて男の声が通る。

「すげーぞ！あの姉ちゃん！あんだけあった量がもう半分以下だぜ!?」
そこに立つ武士(ものの)ども新参者の実力を品定めするように皆マキアへと注目を向けていた。
「ゴクッ、ゴクッ…」
そんな周囲の視線も意に介さずに青髪制服様は大きな器を持ちあげて中身を口の中へと流し込む。
「すげぇ…アイツ噛まずに飲み込んでやがる…」
「一体どこにそれだけのスペースが…?」
「バケモノじゃ…アレはこの世が生みしバケモノじゃ……!!」
細身な女性が大の男でも悪戦苦闘する量を難なく平らげていく様は周囲の見物人を圧倒するには充分で。
「んくっ…プハーッ！ごちそうさま！」
「ご」
そして全てを胃の中に収め終える。
「5分残して完食ーーー!!」
ワァッ、店内中で一斉に歓声が飛び交う。
「やりやがったぞあの嬢ちゃん！未だ前人未到の悪魔の山と呼ばれる『ジャンボスペ

シャル特盛りマシマシラーメン』３０分早食いチャレンジを踏破したーーー!!」
「伝説だーーー!!伝説が生まれたぞーーー!!」
「スゲーよ!マジスゲーよ!本当スゲーよ!!」
場の武士(もののふ)どもが未だ興奮冷めやらぬ中、そんな周囲を置いて青髪制服はその店の店長と対峙する。
「くっ……!まさかこのメニューをクリア出来る者が現れるとは……!」
悔しさの滲む声で恨めしそうに見る店主に対し。
「ふふん、なかなか悪くなかったわ。また挑戦しに来てあげるからそれまでに腕を上げることね」
余裕の笑みで返す。
「～～～～～っ!!約束の賞金と一年間の無料券だ!受け取れ!」
悔しさを噛みしめながら店主は賞金の封筒と一年間その店のメニュー全てをどれだけ食べても無料になる券を渡す。
しかしマキアはそれを受け取らずに返す。
「……?どういうつもりだ?」
青髪制服の行動に疑問を呈する店主。
「本当は欲しいところだけどそれより欲しいものがあるのよ。ここに〝ジェイニー

〝っていう人は来たことない？」
「い、いや…知らないな…」
戸惑いながらも店主は答えると。
「そう、分かったわ。ありがとう」
それだけ言って踵を返すように青髪制服様はさっさと店を出る。
「まま、待ってくれ！」
慌ててその背を追いかけて店主は問うた。
「ま、まさかそれだけのためにあの大食いに挑んだってのか!?一体何のために!?」
すると青髪制服様は振り返らずに。
「そこに――大食いがあるからよ」
それだけ告げてそのまま立ち去る。
その後ろ姿を見ながら膝から崩れ落ちるように衝撃を受けた店主はおもむろに呟く。
「いや、普通に聞けよ……」
そして、フードファイター・マキアの伝説が始まった――。

～Ｑｕｉｅｔ～　彼らの日常　その６

１２

〈リオノーラの調査〉

蓮の花を模したレリックから煌々とした癒しの光がその場を照らしていく。
「はい、終わったわよ。またコケないように気を付けるのよ？」
純白ワンピースは治療を終えると怪我をしていた子どもに向けて微笑みかける。
「うん！わかった！ありがとうおねーちゃん！」
元気に駆けだす子どもを笑顔で見送り、手を振る。
遠くの方で無邪気に遊ぶ子どもたちの姿を見てふと、故郷のタウロにある孤児院を思い出す。
…みんな元気かな。

リオノーラにとって故郷には良い思い出があまりない。
親もおらず、孤児院育ちである彼女は生まれつき人のオーラが視える特異体質が理由で『悪魔の子』と称され、恐れられ、蔑まれ、憎まれてきた。
タウロでのミュータント暴走の一件もあり結果的に町を出ることを余儀なくされたリオノーラであるが、それでも彼女にとって故郷であることは変わりなく、またそんな彼女の帰りを待っていてくれる者もいる。
虹の調査団に入り、そこが今の彼女の居場所となってもなお、未だに思うことがあるのだ。帰りたい、と。
だが、リオノーラは帰らない。
否、帰れない。
調査団と活動を共にするようになって徐々に明らかになっていく情報局の裏の顔。
『ＤＣ計画』はミストレアとネオラントの二世界を巻き込んでの騒動の火種にもなりかねない程危険で、その内容も非人道的であると知った。
そしてその実験対象はレリック保持者の他にその力を移植するなどのために子どもも狙われ、特に身寄りのない子ども——孤児などはまさに打ってつけな訳で——。

「……がんばらなきゃ」

少女はひとり立ち上がる。
可憐な顔立ちに宿る瞳には確かな覚悟を表して――。

１３

〈リアンの調査〉

「ごめんねぇ。おにいちゃん。この歳だとどうも足腰が弱くてねぇ…」
「いえいえ、大丈夫ですよ」
ひとり調査をしていた短髪団長ことリアンはその道中で重い荷物を抱えたまま階段の前で立ち尽くしたご老人を見かけ、その荷物を持って一緒に階段の上まで上っていた。
「どこまで行きますか?よかったらそこまでお持ちしますよ」
そしていつものお節介も発動させていた。
「おやぁ…悪いねぇ…いいのかい?」
荷物の重量は一般男性でも少し重いくらいのもので、それ故にご老人も遠慮がちになってしまうも日頃剣の鍛錬をする短髪団長にとってはそれほど大したことのない物

量である。
そのまま目的地まで荷物を運んだ。
「ありがとねぇ…これお礼にだけどもらっとくれ」
そう言って手渡されたのはアメ玉２個。
普段から依頼をこなし報酬を受け取ることも少なくないリアンであるが、こういった気持ちのこもった贈り物も彼にとっては嬉しいものである。
「いいんですか？ありがとうございます」
アメを受け取り、お礼を述べるとそのままご老人と別れる短髪団長。
「あとでテラとリオノーラにあげよう」
そう言って貰ったアメ玉を大事にポケットにしまうと。
「うわーん！」
「！」
どこからか子どもの泣き声が。
何かあったのかと考えるより先に身体が動き出す短髪団長はすぐに声のした方に駆けだす。
やがて泣いている子どもを見かける。
「ぼく、どうしたんだい？どこかケガでもした？」

子どもの目線になってしゃがみ、落ち着いた口調で話しかける。
「うわーん！」
しかし子どもは泣き続けたままで困った短髪団長。
「うーん…あ、そうだ！」
そこで短髪団長はおもむろに自分のポケットの中を漁ると。
「ほら、ぼく。これあげるからお兄ちゃんに何があったか教えてくれるかい？」
そう言って先程貰ったアメ玉を泣いている子どもに手渡す。
「うわーん…うん」
ようやく泣き止んでくれた子どもから母親とはぐれたことを聞き出せたリアン。
そのまま一緒に母親を探しているとすぐ近くで見つかり、無事親子は再会を果たせた。
「すみません、うちの子がご迷惑を…こちらお礼と言ってはなんですがよかったら…」
そう言って買い物袋から果物を手渡される短髪団長。
「いえいえ、いいんですか？」
それを快く受け取り、お礼を言って親子と別れる。
「そういやグモモが果物好きだったな…」
貰った果物を手に歩いていると。

「きゃー!ドロボウー!」

「!」

悲鳴が聞こえ、見ると今まさに女性からカバンを奪い取り、走り逃げる人影が。

距離的に走っても追いつかないと考えた短髪団長はイチかバチかで持っていた果物をドロボウ目掛けて投げる。

剣の鍛錬で鍛えられた足腰から放たれる投球は思いのほか速度が乗り、みるみる距離を詰め、見事豪速球が犯人の後頭部に直撃する。

「ぶべぇっ!?」

そのまま果物は離散し、逃げていた犯人もその衝撃で倒れた。

「……当たった…」

周囲どころか投手本人も呆気に取られる一幕は閉じ、犯人は捕まりカバンも無事持ち主の手に戻った。

「ありがとうザマス!この中にはあたくしの会社の大事な書類もあって…あ、そうだわ!」

やたらと香水の香りが強い家具メーカーの社長だという人物はそのまま大きめの抱き枕をリアンに手渡した。

「これを差し上げるザマス!こちら当社が開発した低反発クッションを応用した抱き

枕で使用者の負担を軽減させるため…」
「あ、ありがとうございます！」
長々とした商品説明が始まり、キリのいいところでお礼を言って半ば逃げるように抱き枕を持って立ち去る。
「大変だー！子どもがー!!」
その途中突如上から声が。
「え？」
何が起きたのか分からず立ち止まる短髪団長。
途端何かがリアンの上に落ちてくる。
「うぇっ!?」
何が何だか分からない短髪団長。しかし周囲の動揺の視線が自分のところに集まっているのが伝わった。
「……ぷはっ!?……え？」
低反発の抱き枕に押しつぶされるようになっていたリアンはようやく顔を出すとその抱き枕の上に年端もいかない子どもがいることに気づいた。
「あぁ！奇跡だ！子どもは無事だぞ！」
「すごいわ！あの人が身を呈して助けたの!?」

なにひとつ状況が掴めずにいる短髪団長の元に親と思しき人物が泣きながら手を握って感謝の意を伝える。

「ありがとうございます！ありがとうございます！子どもがベランダから身を乗り出してそのまま…本当にありがとうございます！あなたは命の恩人です！」

それに呼応するように周囲から拍手喝采の声が飛び交う。

「あ、あははは…お子さんが無事でよかったです」

その後、お礼がしたいとあるくつメーカーの開発に携わっているというその親から小型のブースターを搭載したシューズを贈られた短髪団長。

そのまま手に持つのもかさばるため仕方なく履いていると。

「危ない！ねこがー！！」

道の真ん中でねこが今まさに車に轢かれそうに――。

「まにあえぇぇぇぇ!!!!!!!!」

すぐさまシューズのブースターを全開にし、常人ではあり得ない速さでねこを救出した疾風の団長。

とある医療器具メーカーの開発関係者と言われるそのねこの飼い主からお礼にパワードスーツを受け取った。

持って歩くにはデカすぎるため着て持って帰ることに――。

「鉄骨がー!!」
建設途中の工事現場から鉄骨が通行人へと降り注がれようとしていた。
「はぁっ！」
その下に音速の速さで駆けつけ、降り注がれる鉄骨を全て受け止めたフルアーマー団長。
たまたまそこにいた軍兵器開発の社長から感銘を受けたとネオラントの技術の粋を集めた手甲を贈呈された。
それも着けて歩く鉄の団長。
「大変だー！建設機が暴走したー!!」
「ガガー、ピー」
声のした現場を見るとどこかで見たことある天才科学者とどこかで見たことある人工知能搭載付きの大型ロボが、建物のビル並みに巨大な機械を前に何やら騒ぎ立てていた。
巨大な機械は周囲のビル群を破壊し、周辺住民も逃げ惑い――。
「……」
そして鉄の団長は――。

14

〈アンネマリー・テラ・グモモの調査〉

「すみませ～ん！ちょっと人を探してるんですが～」
それぞれが別行動を取る中で、ゆるふわおねぇさんと全体的に前衛的な少女と謎のまるふわ小動物の異色な組み合わせをしたふたりと一匹は一緒に調査をしていた。
「人を？どんな？」
声を掛けられた街の人もその奇妙な組み合わせに戸惑いを覚えつつも質問に応じる。
「ジェイニーさんって方なんですが～」
「名前だけだと…なにか特徴は？」
聞かれ、少し考える素振りを見せる。
「えっとですね～。シュッとしてズバッとしてシュビビッ！バリバリ！ズバーンッ！って感じの人です～」
「……」
語彙力が壊滅的なゆるふわおねぇさんがそんな調子である一方。
「ジェイニー、いますか？」

「ぐも」
一方、テラとグモモはゴミ箱の中を探していた。
「ジェイニー、ここですか？」
「ぐも」
入念にチェックしてから次を探す。
「ジェイニー、ここですか？」
「ぐも」
当人の眼差しは真剣である。
「ジェイニーいませんでした……ん？」
あらかた探し終えた頃、成果を得られず落胆していると近くにまるふわ小動物がいないことに気づく。
「グモモ？」
周囲を見渡してもその姿はなく、テラの顔に不安がよぎる。
「にゃ～ん」
するとどこからか鳴き声が聞こえ、その声がする方に向かうと。
「にゃ～ん、にゃ～ん」
「ぐもぐも～♪」

そこでは小さな子ねことまるふわ小動物が仲良くじゃれているところであった。
「…かわいいです」
そのまま子ねこはテラの足元へ体をこすりつけるようにして甘えてくる。
そんな子ねこの頭を撫でながらに少女は呟く。
「ジェイニー、どこにいるんでしょうか…？」
その問いかけに答えられる者はおらず。
「にゃーん」
「ぐもー♪」
ふたつの無邪気な鳴き声がネオラントの青い空に吸い込まれていく。
「シュビッとしてズバァンな人なんですけど～」

15

夕刻。

ネオラントの空も夕焼け色に染まり始めた頃、それぞれ別行動していた虹の調査団一行はあらかじめ決めておいた合流地点で落ち合うことになっていた。

「あ、リュイン」
最初に合流したのは赤ポニテと純白ワンピース。
「どうだった？」
そのまま情報交換で互いの成果を伝え合う。
「んー、街の人たちの協力も得られたんだけど……肝心なのは見つからなかったよ…。リオノーラは？」
聞かれる純白ワンピースは被りを振る。
「んーん、こっちも全然。影も形もない感じ。この街にはいないのかも」
互いに成果がなく、落ち込んでいると。
「どうしたのよ？ふたりしてそんなしょげた顔をして」
そこに青髪制服の声が聞こえた。
「あ…マキ」
声の調子からしてなにか有力な情報を得られたのではとふたりは期待の眼差しを向ける。
しかしすぐさまギョッとした顔になる。
「えっ…マキ……ア……なの？」
「？そうよ？どうしたのよリュイン？」

「いやどうしたって…」

困惑と動揺が入り混じるふたりの前に現れたのは何がとは言わないがパツパツのキツキツで今にもはち切れそうになっている全体的に丸々としたフォルムへと変わり果てた姿の青髪制服様であった。

「マキア!?どうしたのよその身体!?なにかの病気!?」

あまりの変わり様に動揺が隠しきれない仲間を余所に青髪制服山は平然とした様子で。

「何言ってるのよリオノーラ…それよりあたしの方では成果があったわよ」

「え?ほ、本当!?」

一旦体のことは置いておいて再び期待を胸に膨らませる。

「えぇ、ついに成し遂げたのよ…大食いの中でもひと握りの者にしかなれないと言われる『レジェンド・イーター』の称号獲得を!!」

「……」

ふたりから色が失われていく。

「あちこちジェイニーが寄りそうな店を片っ端から回って全ての大食いチャレンジを踏破したわ」

「……え、チャレンジ?調査は?」

「そっちも調べたけど誰も見てないって」
「……あぁ、そう」
やがて何かを悟ったように純白ワンピースは無になった。
「？どうしたのよ？」
「あ、あはは…でも全部見て回ってきたってことはその…大丈夫なの？……体の」
「大丈夫よ。たくさん食べてきたけどあれくらいで体調を崩す程ヤワな鍛え方してないし」
「いやそっちじゃなくて…体重とか…」
埒が明かないと判断したのか結局直接聞いた。
「体重？あぁ、そっちも問題ないわよ。なにせあたしは全部を今日中に回るためにあちこち走り回ったんだから」
そして胸を――今はなにかと危ういラインギリギリの――を張って声高々に。
「走って体の燃焼もされてイーブン！つまり実質カロリーゼｒ」
「そんなわけないでしょ」
論より証拠であった。
「あの…虹の調査団ですか？」
するとそこにおずおずとした様子で三人に話しかける人物が。

青髪制服山の姿を見てギョッとするその人物は同じく上に制服で身を包み、タイトなスカートを穿き、流れるようなウェーブのかかったブラウンの長髪の冷たく堅実そうで仕事が出来るキャリアウーマンのような出で立ち。

「アイリーンさん?」

その仕事ぶりからも冷酷とも呼ばれるアイリーンは普段の氷のような表情からは想像出来ない程に疲れ切った顔で訪ねてきた。

「ど、どうしたんですか!?一体!?」

「マキアさん〜!!」

その後ろからゆるふわおねぇさんが現れるとその勢いのまま青髪制服山に抱き着く。

「すみません〜!あまり有力な情報ありませんでした〜!」

「ちょっ!?分かったからアンネマリー!少し離れて!」

「(すごい…あのマキアを見ても少しも動揺しないんだ……)」

「ただいまです」

「ぐもぐも」

そこにテラとグモモも現れる。

「あ、テラ。…そのねこちゃんは?」

「にゃーん」

「拾いました。名前はまだありません」
「そ、そう…」
場が混沌としたなかで冷徹ウーマンの口が開く。
『『街中で意味不明なことを聞いて回っている女性がいる』との通報がありまして…現地に向かった捜査官ではとても相手が務まらず…」
「あー…」
それだけを聞いて赤ポニテは何があったのかを容易に想像が出来てしまった。
「にゃーん」
「うふふ、この子かわいいわね」
その傍らでテラが連れた子ねこと一緒に遊ぶ純白ワンピースたちの方を見やる。
「あのねこちゃんは？」
「えぇ…どうも路地裏で拾ったと……。他に彼女たちの相手が出来る者がいなかったのでやむを得ず顔見知りの私が相手を……えぇ……しました、とも……」
その時のことを想起してか瞳から光が徐々に失われていくのを赤ポニテは感じた。
「お、お疲れ様です…」
「あ、その子ねこの予防は済ませておきましたので……では私はこれで……」
そう言って冷徹ウーマンは帰った。

その疲れ切った背中を赤ポニテは見送る。
「リュイン。このねこ飼ってもいいですか？」
「え？」
唐突に話しかけられ、思わず聞き返してしまう。
「このねこを…」
「あ、う、うーん…私はいいと思うけど…みんなにも聞いてみないと」
「わかりました」
「にゃーん」
「そういえばリアンは？もう約束の時間過ぎちゃってるわよ？」
純白ワンピースに言われて時計の針が約束の時より数刻過ぎていることに気づく。
「本当だ…何かあったのかな」
約束は滅多に破らない義兄が来ないことに一抹の不安を覚えるリュイン。
『ここで緊急ニュースです』
すると街に設置されている屋外ビジョンに「緊急特報」と表記がされた映像が流れる。
調査団としての性質なのか何か有事の際が起きたのかと皆そこに目を向ける。

《ＬＩＶＥ》

『えー、本日は街に突如として暴走を始め街に被害をもたらしていた人工知能搭載の自律式巨大建造物作業用超大型建設機を鎮圧し、街の窮地から救ってくれた英雄、通称［鉄の男］の関係者と目される虹の調査団団長のリアン・ドラサールさんによる緊急会見が開かれることに…あっ！来ました！』

〔フラッシュの点滅にご注意ください〕

『ど、どうも…。虹の調査団団長のリアンです。本日はこのような場を設けていただき…』

『単刀直入に聞きます！あなたが［鉄の男］ですか!?』

『い、いえ…彼は我が調査団の仲間で…』

『？』

『……』

『僕が、［鉄の男］です』

パシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャッ！

◈

生中継で映される映像越しに調査団の仲間たちは。
「……さすがウチのリーダーね」
「うん…」
「そうだね…」
「わー！リアンさんテレビに出てますよ～！テラさん！」
「はい。すごいです。リアン」
「ぐも」
各々に暖かい視線を向けてやるのだった。
そこには「世紀の英雄！『鉄の男』の正体!!」というテロップと共にフラッシュにたかれる我らが団長の勇姿がありありと――。
『なお、今回の街での騒動を起こしたとされる軍兵器開発に携わる発明家アイザック・ルル氏には街の修繕のための損害賠償とそれまでの勤労奉仕を――――』

16

後日、体重計の上で青髪制服の悲鳴がこだましたのは言うまでもない。

～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～　動き始める物語　その１

１７

ジェイニー捜索から数日が経った頃。

「……」

「……」

「……」

「アリア、おかわりお願いします」

「あ、私にもお願いします～」

「はーい♪」

街中を隈なく探し回った調査団一行であったが、結果は言わずもがな、姿を見た者どころか影すら捉えられない状況となっている。

「もう!どこにいるのよジェイニーは!!」
進展しない状況に耐えかねたとばかりにぶつけどころのない怒りを口にする青髪制服様。
なお、スタイルはこの数日で元に戻っている。(服は伸びた)。
「なんでこんなに調べても何も出てこないのよ!?いくら追われる身だからって少しくらいの痕跡や目撃情報があってもおかしくないでしょ!?私たちみんな総出で探してるのに!!」
「マキアはほとんどジム通いだったでしょ」
「んぐっ…」
純白ワンピースのごもっともな言葉にマキアは借りてきた猫のように大人しくなる。
「でも確かにおかしいよ…。みんなでこれだけ調べても何も出てこないなんて…。この街には来てないのかな?」
その傍で今朝取った新聞を見ながら疑問を口にする赤ポニテ。
「それはどうだろう」
赤ポニテの横で短髪団長が被りを振る。
「ジェイニーの目的を考えるとこういう人の多い街には必ず訪れるはずなんだ。標的もここにいることがあるはずだし、情報も集まりやすい」

「さすが、『鉄の男』の言うことは違うわね」
「それはもうやめて…」
先日、何の因果でかフルアーマーで街で暴れていた巨大ロボと対峙したリアン。
その後会見でまさかの発言に一躍街の英雄として有名となってしまっていた。その影響で連日連夜報道陣による付きまといが起こり、リアンもまたマキア同様満足に捜査活動に参加できていなかった訳で。
「いっそ、あれを着てジェイニーを探してみる？」
「あっ、それ面白そう！」
リオノーラの悪戯な提案に割と乗り気な赤ポニテ。
「本当勘弁してください…」
報道陣からの逃走劇で相当な目に遭ったのか、時の人リアンは自身の顔を手で覆いつくすのだった。
「ま、冗談はさておいて」
と、青髪制服が軌道の修正に入る。
「なんにせよここでの調査は一度打ち切るべきね。他のところで情報収集に当たりましょう」
「そうだね……でもそうなると次はどこに行こうか…」

「うーん…」
もはや雲をつかむ所業に近い相手の所在を探る調査団一行の雲行きもいよいよ暗雲が立ち込め始める。
「みなさーん。ここは一度休憩にしてティータイムに入りませんか?」
そこに重い空気を打ち破るように透き通るような優しい声が広間に響く。
現れたのはごく薄い黄色に毛先がピンクのロングヘアーに整った顔立ち。長身を思わせる体躯に肩と胸元を露出させ、身に着けているドレスは宇宙を思わせるような素材を使っており、聖人と賢人を兼ね備えた雰囲気を醸し出す女性。
「アリア、これは?」
「シフォンケーキです♪」
アリア。
グモモの中に存在する『グモトピア』に住み着く自称管理人。
テラとは旧知の関係らしいが未だに謎多き人物。
調査団にはお茶や料理でもてなし、寮母のような立ち位置になりつつある。
しかしその行動にはいくつかの制限を抱えており、そのひとつとしてグモトピアより外に出れないという一面もある。
また、グモモとは視界を共有することができ、外界の様子を窺い知ることも出来る。

「わー！すごく美味しそうですよマキアさん！さっそくいただきましょ～！」
「シフォンケーキはケーキの中でもカロリーが低いものとされる…さらに熱も加えられているし形も○だから実質カロリーｚ」
「すごーい！ふわふわですごく美味しいー！」
「アリア、おかわりありますか？」
「えっ!?もう食べちゃったの!?テラ!?」
それまでの重い空気とは打って変わって和気あいあいとしたものに変わる。
その様子を見て和やかに微笑むアリアへ短髪団長が話しかける。
「いつもありがとうございます。アリアさん。おかげでみんなの顔が明るいものに変わりました」
「いえいえ♪いつもグモモがお世話になっておりますのでこれくらいは。何かお力になれましたのなら幸いです♪」
リアンにも微笑みを振りまくと、そこでミステリアスな聖女は何かを思い出したかのようにハッ、とした顔つきになる。
「そういえば…お客様がお越しになられていますよ？今グモモと遊んでくれていますが…。なんでもお届け物だとかで」

「届け物？」

～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～　動き始める物語　その２

１８

メルメル。

配達員を思わせる緑の帽子を被り、緑のコートを羽織る自称「幸せ専門運送業」の少女。

彼女のレリックの特性は対象の物と自身を跳躍させる極めて珍しい能力であり、まさに運送業を生業とする彼女には打ってつけである。

そんな空飛ぶ郵便屋である彼女のポリシーは「待っている人にほしいものを届ける」「届けた相手に幸せも届ける」といったもので、そんな彼女から放たれる営業スマイルと押し売りレベルに近い相手への幸運を祈ることも彼女自身の心からのサービス精神である。

「お届け物でーす！」
グモモの口からグモトピアへ入ったメルメルは開口一番に明るい笑顔と共にはつらつとした声をお届けする。
「いつもありがとうメルメル。ここまで疲れたろう？少しここで休んでいったら？」
届け物を受け取った短髪団長は小さな郵便屋を労わるようにお茶会へと招待する。
「ありがとうございますリアンさん！でも大丈夫です！より多くの人にハッピーをお届けするのがボクのお仕事ですから！これくらいへっちゃらです！」
ふんすっ、とまだまだ有り余る元気を示すように両手を前にやる気のポーズをするメルメル。
「そうか？今ちょうどアリアさんが焼いてくれたシフォンケーキをみんなで食べてるんだけど…」
「ケ、ケーキ!?」
それまで初志貫徹だった姿勢を見せていた小さな郵便屋も〝ケーキ〟という単語を聞いた途端に年相応な顔つきに代わる。
「ふわっふわー！美味しいーー！」
「大丈夫…この後レジーナさん直伝のブートキャンプをすればプラマイゼロ…だからもうひと切れ食べても実質カロｒ」

「いくらでも食べられちゃいますね～」
「アリア、おかわりありますか？」
「テ、テラ!?もう６回はおかわりしてるよ!?お夕飯食べられなくなっちゃうよ!?」
「んふふ♪まだまだありますからね～♪」
広間の方で女性陣たちがアリアお手製のシフォンケーキを絶賛するのを短髪団長越しに見るメルメル。
「じゅるり…」
まるで物陰から仲間の輪に入れてほしそうな子どもみたいに熱いまなざしを向けている。
「メ、メルメル？」
「はっ!?」
あまりに食い気味に見ていたために、気づけばリアンの服を鷲掴みにしており、我に返ると小さな郵便屋は慌ててその手を離す。
「すすす、すみません！それじゃあボクはこれで！」
矢継ぎ早に言い終えるとそのまま踵を返してグモトピアから出ようとする。
「あ、待って」
呼び止めるリアンの制止を振り切るも――。

きゅるるるる…。

どこかからなんともかわいらしい腹の音が奏でられた。

「……休むのも仕事の内だよ。メルメル。それにこれは日頃の僕たちからのお礼の気持でもあるからさ。この気持ち、メルメルのところに届けてもらえるかい？」

「……はい。……承りました」

背中越しに頷く小さな郵便屋の顔は耳まで真っ赤に染まっていたという。

～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～　動き始める物語　その３

１９

「おいしーーーー!!」

ひと口目から溢れんばかりの笑顔を振りまく小さな郵便屋。

アリアお手製のシフォンケーキを気に入ったのか、次々とその小さな口へケーキを運んでいく。

ひと口食べるごとに笑顔を振りまくのでそれに釣られて調査団一行もまた笑顔になる。

「うふふ。そんなに焦らなくてもケーキは逃げたりしないよ？ねえ、マキア」

「大丈夫…この世の万物はいずれ自然へと還る…だから今ここで私が摂取しても結局はゼロになる…大丈夫…」

「マキア…」

約一名謎の悟りを開き始めている横で、メルメルはあっという間に皿の上のケーキを平らげてしまうのだった。
「ごちそうさまです！とっても美味しかったです！アリアさん！」
「んふふ♪お粗末様です♪」
小さな郵便屋が食い気味に絶賛する中アリアも微笑みながら応える。
「ケーキを食べたら元気が出てきました！今ならより多くの人たちにハッピーをお届け出来そうです！」
そう言って早々にメルメルは赤いショルダーバッグを肩に掛けて立ち上がる。
「あれ？もう行っちゃうの？もう少しゆっくりしていけばいいのに」
純白ワンピースが引き止めようとするも。
「いえ！大変ありがたいお誘いではありますがまだまだお届け物を待っている方々がいますので！また今度お時間合う時に誘っていただけると嬉しいです！」
やる気の過充電をされた郵便屋を止められそうな者はここにはいなさそうで。
「そう…分かったわ。でもあまり無茶しちゃダメだからね？配達だって言っても大変なこともあるんでしょ？」
より多く、たくさんの人たちへ幸福をお届けすることを信条とするメルメルは必然その届け先は多岐に渡り、ネオラント、ミストレアの二世界を方々にひとりで飛び渡る。

たとえレリックによる恩恵があるとしてもその負担はひとりのかよわい少女には背負いきれないだろう。

しかし、そんな心配は無用と言わんばかりに小さな郵便屋は答える。

「大丈夫ですよリオノーラさん！なんてったってボクのレリックには跳躍とは別に届け先へと一瞬で瞬間移動してたどり着いちゃうことも出来ちゃうんですから！」

メルメルのレリックの能力には跳躍以外にも届ける物と届け先を明確にイメージしただけでその場に飛ぶことの出来る瞬間移動がある。

これによりたとえ世界の果てであろうとも彼女がイメージ出来れば一瞬で配達することが出来る。

まさに配達運送業の者にとって理想的な能力に小さな郵便屋は誇らし気に胸を張る。

「へぇ…さすがは風の配達人ね」

えへへ、と慣れない異名に照れくさそうにするメルメルの横で。

「それだ！」

と、突如リアンは声を張り上げる。

「うわわっ!?えっ!?なっ、なんですか!?」

「ど、どうしたのよリアン!?いきなり大声出して!?」

「んぐっ……!?!!」

「マ、マキア!?大丈夫!?アリアさんなにか飲み物を!喉を詰まらせたみたいです!」
「は、はい!こちらに!」
周りが短髪団長の大声に驚くなか、当の本人はというと確信めいた顔つきでメルメルの顔を見つめ続けていた。
「リ、リアンさん…。そんなにまじまじと見つめられると……ボク……」
短髪団長から注がれる熱い視線から隠れるように照れた郵便屋は帽子を目深に被る。
「ちょ、ちょっとリアン!」
突如ふたりの間で繰り広げられる甘酸っぱい雰囲気に慌ててリオノーラが引き離そうと短髪団長の服を引っ張る。
「どうしたのですか?リアン」
「戻りまし…えっ!?マ、マキアさん!?大丈夫ですか~!?」
そこにいずこかへ行っていたテラとアンネマリーが戻り、場は混沌へと誘われようとしている中でリアンは興奮気味に口を開く。
「ジェイニーだよ!ジェイニー!メルメルのレリックがあれば見つけられるかもしれない!」
「あ」
そこで純白ワンピースも何を言わんとしているのかを理解したようで。

「そうか…！メルメルにジェイニー宛ての届け物をお願いすれば…！」
「そうすればメルメルのレリックでジェイニーの居場所が分かるかもしれない！」
ようやく活路を見い出せたふたりは一喜一憂するなか、期待の眼差しを小さな郵便屋へと向ける。
「え、えと…」
一方、未だ状況が飲み込めていないメルメルは困惑を隠せない様子でいた。
「そ、その…ジェイニーさんって方にお届け物があるってことでしょうか？それでしたら引き受けますが…」
「あ、そか。まず届け物がないと。なにかある？」
「うーん……あ、なら…」
と、しばらく考え込んでいた短髪団長は近くにあった紙とペンでさらさらと簡易的な文章を書きあげる。

『ジェイニーへ
　リアンです。お元気ですか？久しぶりに会いたいです。
　またみんなで食べ歩きしながら一緒に遊びましょう。
　リアン・ドラサールより』

「これでいいかな？」
出来上がった文を純白ワンピースに見せる。
「……文面はともかくリアンって字ヘタね…」
「えっ!?そ、そう!?」
指摘されて改めて自分の書いた文字を見るも、リアンはミストレア人。ネオラントとも交流が多いため必然ネオラントの文字を書く機会が増えるために覚えたが、まだ覚えたてということもあり字の良し悪しを判断することなど出来ないのであった。
「き、気持ちがこもっていれば大丈夫ですよ！」
必死な形相で自分の書いた字を検分する短髪団長にメルメルはフォローを入れてくれるも今はその優しさがリアンには痛い。
「……とりあえずこれをジェイニーに…」
気落ちしながらも手紙をメルメルに渡す短髪団長。
あとでネオラントの字の練習をしようと強く心に誓うのだった。
「はい！お預かりします！それでこちらジェイニーさんはどちらにおられますか？」
「え」
「え？」

この時リアンは思い違いを起こしていた。
メルメルのレリックは届け先に届け物を一瞬で送るものではなく――『届け先の相手』と『届け物』、そして『届ける場所』を明確にイメージすることで瞬間移動を可能にするもので。
いずれのひとつでも――例えばメルメル自身が行ったこともないような場所だと能力は発現しない。
つまり、相手がどこにいるのか分からなければ瞬間移動は出来ない。
「……」
「……」
「えと……」

ふりだしに戻る。

２０

「ぷはぁっ!?……はぁー…死ぬかと思ったわ……」
「マキアーーー!!無事でよかったよー!」
「マ゛キ゛ア゛さ゛ん゛～!生き゛て゛て゛よ゛か゛った゛て゛す゛～!!」
そして青髪制服は生還した。

～Ｐｒｏｌｏｇｕｅ～　動き始める物語　その４

２１

しかし話はここで終わらない。

またも進展なしと落ち込むふたり。その落ち込み様に小さな郵便屋は自責の念に駆られるように話しかける。

「す、すみません……ご期待に沿えず……」

申し訳なさそうに謝るメルメルを見て短髪団長はその頭に手を置いて朗らかに笑う。

「いやこっちこそごめん。変に期待しちゃって。メルメルが一生懸命に誰よりも頑張っているのは僕たちはもちろんみんな知ってるよ。だからそんな顔しないで」

そのままくしゃくしゃと頭を撫でると小さな郵便屋の暗い顔は徐々に晴れやかなものへと変わっていく。

それを見て内心安堵するもリアンは思案する。
「しかしジェイニー…居場所か……一体どこにいるんだろ」
「はい……さすがにボクも行ったことのない場所や知らない場所となると…」
と、頭を撫でられてなにやらもじもじと顔を赤らめていたメルメルであったがそこで何かを思い出したかのような顔つきになる。
「そ、そういえば……配達の途中で聞いた話なんですけど……なんでも誰がどこにいてもその人の居場所を当てられちゃうすごい人がいると」
「そ、それ本当!?詳しく!!」
「ふにゃぁ!?」
小さな郵便屋の口から発せられた情報に短髪団長は藁にもすがるような勢いで食いつく。
頭を撫でる速さも変わる。
それの影響なのか小さな郵便屋の目がとろんとし始める。
「はにゃ……は、はぃぃぃ……。た、ただボク…も……あっ……う、うわさ程度……のもの……なんです……はわぁ……けどぉ……!」
頭を撫でられながらもメルメルが言うには。

その人物が言うことは全て当たる。
その人物は前触れのなく現れて唐突に消える。
その人物は全てを知っている。

と言ったなんとも曖昧な情報ばかりであった。
「噂…ね。ねぇ、メルメル。それってどこで聞いた話なの？」
生還を果たし、落ち着きを取り戻した青髪制服は噂の出所を探ろうとする。
「はうぅぅう……そ、それなんですが…あ、ダメ……この話を聞く時はいつも……はにゃにゃあ……ミストレアに……も、もうダメ……配達に行った時でして……あうぅぅう」
「……ねぇ、リーダー。一度撫でるの止めたら？」
「え、そんな…」
そう言われて軽くヘヴン状態に達しつつあったメルメルの頭から短髪団長は名残惜しそうに手を離す。
「リアン、頭を撫でたいのでしたら私の頭をどうぞ」
テラが代役を打って出てくれたがそろそろ周囲の視線が厳しいものに変わっていたのでやんわりと断った。

「ミストレアか……噂が本当ならばその人物はよほど情報収集能力に長けているのかそれともなんらかの手段を用いて情報を集めているのか……いずれにせよ気になるところね。ねぇ、他に情報とかってないの？」

「え、えっと…」

乱れた髪を整えつつも頬を赤に染めるメルメルはしばし考え込む。

「あっ、そういえばその方はよく星空を眺めていたそうです」

「星空？」

「星が好きなのでしょうか？」

「たしかに星空って見ているとキレイですよね～。わたしもよくブルーバードの上から夜の空を眺めてたりしてますよ～」

「なんで上からなの…？」

話の方向性が若干脱線しかけるも青髪制服の咳払いひとつですぐさま軌道を修正する。

「はい…なんでも『星が教えてくれる』んだそうです。……すみませんこれくらいしか情報を持ってなくて」

「いいえ。十分すぎるわメルメル。ありがとうね。またこういう噂とか聞いたら教えてもらえると助かるわ」

再び沈んだ表情を浮かべる小さな郵便屋であったが青髪制服の言葉を聞いて弾けるような笑顔に変わり。

「はい！ハッピーデリバリーメルメル！あなたの幸せを届けるため！いつでもどこでもハッピーをお届けします！それではボクはこれにて！また会いましょう！虹の調査団のみなさん！」

ひと通り謳い文句を述べるとそのまま笑顔を振りまいて小さな郵便屋はグモトピアから外へ出るのだった。

メルメルを見送った後。

「ねえ、リュイン、リーダー。メルメルが言っていた噂ってミストレアでは有名なものなの？」

マキアに問われ、ふたりはしばらく考え込むも。

「うーん…ちょっと聞いたことはない……かな？リアンは？」

「……僕も聞いたことない。……星か」

互いに被りを振る。

「そう……やっぱり噂でしかないのかしら。まぁ、そんな都合よくはないわよね」

言うや青髪制服がため息を吐くと沈黙が生まれる。

「ま、しょうがないわよ。ここは地道にジェイニーを探していきましょ」

純白ワンピースが切り替えるように手を叩く。
「……それもそうね。それじゃあ次の行き先だけど…」
と、次の調査場所を決めるためにそのまま話を進めようとする。
「待って」
そこにリアンの制止の声が掛かる。
「……？どうしたの？リアン？」
訝しむ女性陣を集め、短髪団長は考え込むようにして口を開く。
「……噂について心当たりがある」
「え？」
突如語られる言葉に皆一様にリアンの言葉に耳を傾ける。
「噂の内容だけだとピンと来なかったけど…その人が星を見るって聞いて思い出したことがあるんだ」
「そ、それって？」
いつもとは違う真剣な雰囲気にその場の全員が呑まれていく。
「言ったことは全部が当たる…まるで全てを知っているかのよう…これって占いのことなんじゃないか？」
「占い？」

ひとつひとつを整理するように短髪団長は順当に話し、ある結論へと導いていく。
「占いをする人物…そして星が教えてくれる…このふたつに関して僕たちはそれをよく知る人物を知っている」
「え」
「あ」
「あ―！」
やがて、その場の全員の頭にある人物が浮かび上がる。
そして、それは調査団の物語を大きく動かすこととなる。

「「「「シャルミラ!!」」」」「骨董品店のおばぁちゃん！」

「待って。今ひとり違うこと言ってなかった？」
「シャルミラです」

しかしそれに気づく者はまだ誰もいない。

～ｂａｌｍｎａｓｂｔ　ｌａＫａｒｍａｒａ～　前兆

その１

２２

［ここまでのあらすじ］

情報局に対抗するために情報を集めていた虹の調査団。
しかし調査は難航、途方に暮れていたところで元情報局の一員のジェイニーへと目を付けるもその居所が分からずじまいであった。
そんな折、「誰がどこにいてもその居場所を言い当てられる」という人物の噂を聞き、その人物の行動から共通する調査団がよく知る者の名前へと思い立ったのだった。

２３

そして、虹の調査団は今。
王都キルシュバウム王国にいた。

２４

「ちょっと！なんで入れないのよ!?」
王都キルシュバウム王国。
ミストレアいちの大国である通称バウム王国は二世界がひとつとなる前から存在しており、その歴史も古い。
由緒正しい伝統と文化を重んじ、また女王と民を守る王国騎士団は脅威から守る盾にも敵を攻める矛にもなり、国にとって誇りでもある。
また、諸外国との交流も盛んに行っており、近年ではネオラントとも交易をする商会もしばしば見られている。
「なんであたしたちは入れないのよ!?」
バウム王国・関所前。
王都キルシュバウム王国はその国柄敵も数多く存在する。
今はダストという共通の敵が現れたために表面上は停戦をしてはいるがその水面下

では国家間の争いが続いている。
そのためバウム王国の出入り口とも言える場所に関所を構え、危険物または人物が国に脅威を及ぼさないように見張りを立てている。
その検問所にて、青髪制服様は憤りを隠せない様子で門番である騎士に食い掛かっていた。
「ちょ、ちょっとマキア…」
そんな青髪制服を宥めながらリオノーラは門番の騎士を真っすぐに見据える。
「あ、あの…あたしたち虹の調査団です。ここには調査のために訪れたんだけど中に入れてもらえませんか……?」
おずおずとした調子で涙で滲ませた瞳で訴えかける。
「申し訳ありませんが如何なる理由であってもネオラントの者は通さないようにと申しつけられていますので」
しかし、その身に纏う堅牢な鎧の如く頑なな意思でもっての対応が返されるばかりで事態は一向に進展しないのであった。
「一体どういうことなんだろ……?」
一方、その様子を遠くから見ていたリュインとリアンにテラ、グモモは難なく通過出来た。

ミストレアでは一般の者でも自衛という名目で剣の帯刀が許されている。それはバウム王国内でも同じで、ネオラントでは剣を腰に差さずにいたリアンもミストレアにいる時は帯刀するようにしている。

だが、そのリアンは問題ないというのに剣はおろか手ぶらでいるマキアやリオノーラが問答無用で止められるというのは妙な話であった。

しかも理由がネオラント人というのだからなおさらだ。

ちなみにテラの検問は門番も少し悩んだ末に通した。

「なんでよ!?前は普通に通してくれたじゃない!?なんで今回はダメなのよ!!」

もはや一種のクレーマーと化しつつある青髪制服に対しても門番の騎士は頑なな姿勢を崩さなかった。

「現在、厳戒態勢を敷かれておりますので」

「だからってなんでネオラント人だけが入れなくなるのよ!?」

「それに関しましては申し上げることは出来ません」

「……!!」

先ほどからの馬耳東風な対応にフラストレーションが募っていく青髪制服様の我慢の限界は近かった。

今にも門番に殴り掛かりそうな勢いのマキアを見て短髪団長は暴れてもすぐに取り

押さえられるようにと仲間に目線で伝える。

「何事ですか？」

一触即発な状況の中、ひとつの張りのある声が突き通る。

クリーム色のボブヘアーに気品あるカチューシャを着け、どこか高貴さを出しつつも幼さも残る端正な顔立ちに一見似合わないような蒼玉色の鎧の上にドレスを身に着けたような力強さと可憐さも兼ね備えた出で立ちをししつつもどこか芯の通っている女性騎士。

「トリストラ！」

トリストラはバウム王国守護騎士団の分隊長を務める中堅株で、その主な役回りは団員の指導役や各分隊長のまとめ役など組織の要を担っている。

虹の調査団とは当初はそれぞれの思惑から衝突することもあったが、今では共に肩を並べて戦い、且つ騎士として以外の世界に触れてみたいと意欲的に協力する関係を築いている。

「虹の調査団……」

しかし、この日の彼女はどこか重苦しい雰囲気をまとっていた。

バツが悪いというか、今顔を合わせるのはマズいような空気。

この感じはまるで初めて会った時のような――。

「……？」
その表情はすぐになりを潜め、いつもの毅然とした顔になるも短髪団長だけは見逃さないのであった。
そのままドレスの騎士はリアンたちを通り過ぎ、揉めているマキアたちの元へ向かう。
「あっ！ちょっと！トリストラ！あたしたち王国内に用があるんだけどこの人がネオラント人だから通さないって言うのよ！なんとか言ってよ！」
「マキア……」
知り合いを見つけて水を得た魚のように得意気になる青髪モンスター。
そんなふたりの間に立つようにトリストラが割って入ると。
「申し訳ないですが現在バウム王国内にネオラント人を入れることは出来ません。お引き取りを」
と、言い放った。
「え……？」
さすがにそう言われるとは予想しておらず、青髪制服も一瞬呆けたような顔をする。
「な、なんで」
「この者たちを丁重にお送りしろ」

「はっ」

有無を言わさない勢いでドレスの騎士はそれだけ言うと、短髪団長たちの方へと振り返る。

「ついてきて」

「え？」

一瞬、聞き間違いとも思えるような小声が聞こえるも、当の本人はそのまま何事もなかったかのように検問所から出てしまったため短髪団長と赤ポニテは互いの顔を見合わせながらもその言葉を信じて言われた通りにその後を追いかけるのだった。

「ちょっと待ちなさいよ！ちょっとーーーーーっ!!」

後ろで騎士たちに引きずられながら喚く青髪制服の姿を捉えて。

その叫びは自然豊かなミストレアの風に乗って、遠く、響き渡る。

～ｂａｌｍｎａｓｂｔ　ｌａＫａｒｍａｒａ～　前兆　その２

２５

バウム王国・城下町。

あの後、トリストラの言われた通りに跡を追いかけていた短髪団長含め三人と一匹。

その間ドレスの騎士は一度も話すこともなく、また短髪団長たちの方を振り向くこともなかった。

やがてはとある宿屋の一室に入り込む。

「ふぅ…」

部屋に着くや否や、ドレスの騎士はそれまで引き締めていた表情を緩め、朗らかな表情を短髪団長たちに向けてくれた。

「ごめんなさいね。特に説明もなくここまで…。あの場では立場上あなたたちと懇意

である姿勢を見せられなかったのよ」

「……？」

なにが何やらと言った状況の中で短髪団長たちはひとまずは落ち着いて話が出来る場を設けてもらえたことにひとまずの安心感を得る。

「私たちと仲良くするのはダメなのですか？」

そこにテラが直球の言葉で斬り込んでくる。

空気を読まない発言にリアンとリュインは固まったまま動けないでいた。

ドレスの騎士もさすがに虚を突かれたのか目を丸くしている。

「ち、違うのよ!?別にあなたたちと仲良くなりたくないって訳じゃなくて!!その…」

あたふたとした様子で弁明に入るところで。

「ネオラントの侵略を許すなー!!」

突如外から響く怒声。

慌ててリアンは窓から顔を出して外の様子を見ると、複数の団体が集まって道の真ん中を闊歩する様が見れた。

「二世界大戦より和平を結ばれて幾歳!!世は平穏が訪れ価値観は違えど我らは共に生きていくことを良しとした!!なのに!!ネオラントはこの平穏を脅かし、あまつさえ秘密裏に戦争の準備を進めていたという背信行為!!激しく遺憾である!!我らは信じてその

手を握ったというのに奴らはそれを振り払ったのだ!!かの大戦で流れた血は決して少なくない!!その犠牲の元に今の平穏があるというのに奴らはそれを無駄にし、先人たちの想いを侮辱した!!もはや言葉による和解など見込めない!!我らも剣を取り、自国を!!世界を!!家族を守るために今ミストレアは立ち上がるべきなのだぁ!!」

「おぉーーーーーーーっっ!!!!」

戦闘に立つ人物を筆頭に集団は呼応するように声を張り上げながら町中を行進していく。

「な、なんですかアレ……？」

あまりに異様な光景に戸惑いが隠せない短髪団長に対しドレスの騎士は沈痛な面持ちで答えた。

「先日…リブラでの両世界各国の代表たちが集う親交会談が行われる日に起きた爆発の件は知ってるわよね？」

リブラの倉庫爆発事件。

公には中の火薬庫が引火したことによる爆発ということで処理されたものだが、その実そこにあったものは両世界の関係に亀裂を入れるのに十分なものであり、現在判明していることも少ないために謎の多い一件としていた。

そのことが虹の調査団は【封鎖エリアＢ３】クレーブスに行くきっかけとなり、ひい

ては情報局とも戦う契機ともなった――。

「その一件は事故として処理されたはずなんだけど…一部の上流貴族がどこからか聞きつけたみたいでね。ネオラントがミストレアとの戦争の準備を進めていると危ぶんだ公爵たちが各自で武器の製造と収集を始めるようになったの」

「そ、そんな!?」

それではまるで――と口が動いたところでリュインは口を噤んだ。

「それが原因で……あのデモが?」

リアンが表面上は落ち着いた口調で話すも、ふるふるとドレスの騎士は首を横に振った。

「そうじゃないの……問題はその貴族たちが行った製造や収集を自治民たちに強いたことなのよ……」

ギュッ、自身の手を強く組んでトリストラはその重い口を開く。

「最初は…武器商人や鍛冶職人の競争から始まり、次第にインフレが起きると次は個々が武器製造のための製造所を設けて知識のない民たちを半ば無理やり働かせ、さらには領民たちを兵士とするために訓練を行わせ、挙句の果てに軍資金を集う名目で民たちの月々の税を引き上げたり……今バウム王国周辺はパニック状態なのよ」

告げられた事実はリアンたちが想定していた以上に大きく、深刻化していた。

皆、あまりのことにひと言も発せずにただ聞いていた。
「無茶な労働に過酷な訓練、そこに上がり続ける重課税……領民たちの負担は日増しに増える一方でその不満が爆発するのに時間はそれほど掛かりはしなかった。でも…」
そこでトリストラは目線を下に落とす。
「でも……貴族制であるバウム王国で貴族に逆らうということはどういう意味を指すのかは自明の理。そこで彼らは自分たちの中に燻り続ける怒りの矛先を向けられる相手を探したの。……それが」
「ネオラント……ですか？」

２６

同時刻。
バウム王国・外周辺。
「何よそれ!?」
あの後、関所にいた門番たちに「丁重に」送ってもらったマキアとリオノーラはその付近の茂みから現れ出た顔馴染みの騎士、ガレサから今バウム王国で起きている事の顛末を聞かされていた。

ガレサは騎士の称号を貰ってからまだ日も浅い、どこか儚げで幼さが残る印象を持った騎士だ。
長い紫髪を後ろにふたつのおさげを携えた学生服の上に鎧を身につけたような装いで、正道から反することを嫌う清らかな心の持ち主で、常に物腰が低く忍耐と礼節を持って事に当たるその姿勢には周囲を魅了して止まない。
現在はバウム王国周辺の見回りの最中で、マキアたちが門番の騎士に「丁重に」送られていた様子を見て周囲の目を忍んで接触を図り今に至る。
おずおずとした調子で話す清楚な騎士を前に青髪制服は憤りを見せる。
「つまり領主やその上にいる貴族たちが好き勝手にするからその不満がネオラントに向かってるってことでしょ!?だったらあたしが直々にその貴族たちをとっちめてやるわ！」
「えぇっ!?」
「マ、マキア落ち着いて!?」
頭に完全に血が上り詰めている青髪火山の噴火まで時間の問題であった。
今の発言が万が一にでも貴族の耳に入るようならば、たとえネオラント人であるマキアであってもただでは済まない。
そのことを一番よく理解しているガレサは表情を青ざめたままにあたふたとした様

子で青髪火山の口を手で押さえる。
「なななななな、なんてこと言うんですか!?今のを貴族の方たちに聞かれでもしたら……！」
「むがもがむごっ!?」
慌てて周囲に視線を巡らせ、誰の気配もないことに安堵の息を漏らす。
「ひ、ひとまずは今守護騎士団内でも近々貴族たちに規制を促す方針で動いています…。それまではマキアさんたちも控えるようにお願い出来ますか……？」
諭すようにお願いする清楚な騎士であったが青髪火山の熱が引いていく様子は見られない。
「マキア……」
その様子に懸念したリオノーラは目で訴えかけるように話しかける。
「……分かってるわよ…」
未だ腹の据えどころが悪い青髪火山ではあるが、ひとまずはその鳴りを潜めるのであった。
おもむろに来た道を振り返る。
その先は今は自分たちが入れない国、バウム王国。
そこには自分たちの仲間たちが今も混乱の中で情報局に至るための情報を集めてい

るはずであり――――。

「……っ」

握る拳が強くなる。

今も奔走する仲間たちを想い、その力になりたいと思うもその自分たちネオラント人がその調査の妨げの要因になりかねないという事実の板挟みに、マキアは歯噛みして耐え忍ぶことしか出来ないのであった。

～ｂａｌｍｎａｓｂｔ　ｌａＫａｒｍａｒａ～　前兆　その３

２７

バウム王国・城下町。

「ネオラントの侵略を許すなー!!」

町中で響くデモの叫びを遠くに短髪団長たちは捜索に入っていた。

あの後、トリストラから町の現状を伝えられたリアンたち。

その際この混乱が落ち着くまで調査団の活動は控えるべきと提案されるも、それで止まる彼らではなかった。

「はぁっ……分かったわよ」

やがて、小一時間の説得も無意味と観念したドレスの騎士はある条件を下にバウム王国での調査団の活動を認めることとした。

一つ、自分たちが虹の調査団であるということを知られてはいけない。
一つ、デモとの必要以上な接触は控えること。
一つ、目的を果たしたら速やかにバウム王国から出ること。

これがトリストラとしても譲れる範囲らしい。
「いい？この三つの約束は必ず遵守すること。今のバウム王国にとってあなたたち調査団の立ち位置は騒動を激化する発火材になりかねないわ。そうなるといくら私たちでも庇いきれない。混乱を防ぐために守護騎士団はあなたたちにその務めを果たすことになることを肝に銘じておいてね」
「わ、わかった…」
釘を刺すように言いつけられた短髪団長は頷くもその表情は強張っており、見るからに緊張しているのが分かる。
その様子を見て、くすっ、と微笑んだドレスの騎士は活を入れるように、とん、とリアンの胸を肘で軽く小突くとおもむろに部屋に設えてあるクローゼットから何かを取り出すとそれを短髪団長たちに手渡していく。
「外に出るときはこれを被って行きなさい」
手渡したのは頭巾が付いた外套。

体の大部分を覆い隠せ、顔も付いている頭巾を被れば端から見ただけでは誰なのか分からなくなる。

「却って目立つんじゃないかな…？」

「あなたたちが虹の調査団ということを隠すための処置よ。それに魔術師団ではフード被ってる人も多いから意外とバウム王国内では普通よ」

「そ、そうなんだ…」

最初は着ることを躊躇っていたリュインたちであったが、調査のためと割り切って外套を纏うのであった。

「ブカブカです」

「ぐもぐも！」

「トリストラ、グモモの分はありますか？」

「え!?ご、ごめんなさい……ないかな…」

「そうですか…」

「ぐも…」

そして現在。
リアンたちは町でデモの行進がある中で陰に潜めるように情報収集にあたっていた。
目的の人物がよく行く店、その人物との関連や縁のありそうな場所、いそうな物陰など思い当たるところへ片っ端から捜索をした。
しかし、どれだけ探しても目的の人物が見つかるようなことはなかった。
「ふぅ…」
ひと通り調べ終えた短髪団長たちは一度小休止を挟むために人の立ち入りが少ない喫茶店を訪れていた。
「なかなか見つからないね……」
「うん……」
「すみません、ここに〝ぽすた〟はありますか？」
「ぐもぐも～♪」
調査の方は難航していた。
ジェイニーの件とは違い今探している人物は〝確実に〟バウム王国にいる。
しかし、それは逆を言えばバウム王国にいることしか分からない。
言わずもがな王都キルシュバウム王国は広く人口もミストレアいちだ。
そもそも、調査団がその人物と出会うのはいつだって向こうから接触があった時がほ

とんどだ。
調査団一行がバウム王国に滞在すると、いつも〝なぜか〟向こうから近づいてくる。
その際、調査団の背後からネチネチとした視線を投げかけながらコソコソと尾行してくる。
本人は至って真面目に隠れているつもりらしいが、調査団含めその周りの者にも大概尾行していることはバレている。
そういうこともあり、当初はバウム王国に訪れればそのうち〝なぜか〟向こうからやって来てくれるために、見つかるのにそれほど時間は掛からないものと思われていた。
だが、現在戒厳令を敷かれており、町中でデモが発生する状況では安易に外に出ることが叶わない。
デモに反対の住民も警戒して外出を控える者が多いため、必然、調査も滞りを見せている。
そうなると外にいるのは大半がデモ参加の者となるために接触を禁止されているリアンたちにはかなりの制限の下での調査になっている。
「やっぱり今はこんな状況だから外には出てないのかな？」
「かもしれない……」

「グモモ、〝ぱすた〟美味しいですか?」
「ぐもずるる…」
想定外の足止めを食らってしまい、リアンたちの表情に沈鬱な影が差し込む。
こうしている今でも情報局は秘密裏に計画を着々と進めている。
その手段を選ばない非人道的な行いはとても許されたものではなく、ミストレア、ネオラントの両世界にその魔の手は今も差し迫っている。
その脅威を払うためにも一刻も早く情報局の居所を突き止め、計画の阻止をしなくてはこの悲劇は終わらない。
そのことも相まって逸る気持ちが募っていく。
「やっぱりカロルさんにお願いしてみよう」
気づけばリアンの口は自然と動いていた。
「えっ!?でもそれは…」
リアンの言葉に赤ポニテは当惑する。
王家の相談役であり、王国全土の防衛にも携わっているバウム王国軍を率いる大総督を担う四賢人のひとり。
常に一手、二手先を読む頭の回転の速さは最早凡人の理解を超えているとされている。

それがカロルという人物だ。
先のリブラでの一件、虹の調査団は故あってその四賢人のひとりである彼女と行動を共にし、事にあたっていた経歴を持つ。
以降、彼女は大総督としても個人としても度々調査団と行動を共にすることが多くなったため交流も深い。
ただ、それでも国の重鎮とも言える人物にそんな気軽に会えるのかと言えばその限りではない。
リュインが懸念しているのは先にトリストラから伝えられた事柄にある。
『現在この混乱に乗じて王都キルシュバウムに攻め入ろうと企てる諸外国や謀反を起こそうと考える逆賊の動きがあることも報告に上がっていてね……。現在アセリア様含め四賢人の方々はその対応に追われて緊急会議を開き、今も対策を練っておられる最中なのよ……』
『えっ？じゃあフレミィさんも？』
『フレミィ殿は欠席されている』
『……』
同時に余計なことも思い出してしまう赤ポニテ。
父ロベール・ドラサールの知人であり、リアンたちが幼少の頃からなにかとお世話に

なっているリュインの恩師でもあるフレミィの有事の際でも通常運転な行動にはその時の赤ポニテも苦笑いを浮かべることしか出来ないでいた。

ともあれ、現在この火急時であるなかでその邪魔をするような押し入りをするというのはさしものカロルといっても寛容ではいられないだろう。

最悪今後の虹の調査団としての活動にも支障が生じかねない行いだ。

そしてそれは短髪団長も重々承知の上であるはずで、その上での発言なのだから赤ポニテの困惑は尚更である。

しかし、本人の意思は固いようで。

「このままじっとしていても状況は変わらない。さっそくカロルさんに会いに行こう」

言うが早いか席から立ち上がり、王城に向かおうとする。

その顔には焦りの色のようなものが出始めていた。

「?もう行くのですか?グモモ、行きますよ」

「ぐもっ!?ぐもずるるるるるっ!!」

「ま、待ってリアン!!」

あまりに勇み足な行動にリュインは慌てて短髪団長の前に立ちはだかる。

「リュイン、今は…」

「聞いて！」

普段はリアンに対して声を荒げないリュインだが、この時ばかりは語調も強くなる。

義妹のあまり見せないその姿に短髪団長も雰囲気に飲まれるのであった。

赤ポニテはまっすぐと目を見て言う。

「今はこんな事態だしカロルさんたちもみんな忙しいはずだよ！そんな時にあたしたちが邪魔しちゃ悪いよ！一旦落ち着いて！」

リアンは団長ということもあってどんな時も冷静に物事を見据えて判断をするが、しかし、切迫した状況に追い込まれると自分を顧みずに突発的な行動を取るという悪癖がある。

それは昔、ふたりが幼い頃。

リュインがまだ魔法の制御が出来ず、魔力の暴走で村近くの森一帯を燃やし、そこにひとり残されたことがある。

そのことを知ったリアンは周囲の反対を押し切って衝動的に燃え盛る森の中に単身文字通り体ひとつで入りこんだという。

結果的に森の火は鎮火し、ふたりも無事助かったものの一歩踏み違えればリアンの命が危うかった状況でもあった。

それは彼の良きところでもあるが、同時に致命的でもある。

それが団長という立場であるならば尚更である。
リブラでの一件、情報局との対立、進まない調査、バウム王国の現状、そしてミストレアとネオラントに生じ始めた亀裂。
何も解決せず、ただ事態だけが深刻になっていくことに虹の調査団団長として、なによりリアン自身に重圧が掛かっていたのかもしれない。
そして、知らず知らずのうちにそれをひとりで背負おうとも。
確固たる意志を持って赤ポニテは続ける。
「情報局のことはダフネさんやメーヴィスさんも動いてくれている！バウム王国だってアセリアさんやカロルさんにアルドルフさんたちが必死になって考えてくれてるし守護騎士団や魔術師団の人たちが頑張ってくれてる！それに私たちだっている！リアンひとりが全部を解決しなきゃいけない訳じゃないんだよ!?」
「……っ!?!!」
発破をかけられたかのような衝撃。
見るとリュインの目には涙を湛えてそれが頬を伝って床に落ちていくのをハッキリと。
それにより焦燥感に駆られていたリアンも我に帰る。
『だからこそ将である貴方は鋭く決断をしなければ。そのためにも盤上をよく見るこ

とです。起こりうる全てのことを』

かつてリブラでカロルに言われたことを思い出す。

それは彼が団長という立場であることの責任と覚悟の表れであるとリアンは理解していた。

仲間を危険から守るために、的確な指示を出すためにも、いの一番にその場の状況を把握し、理解する必要があると。

だが、この言葉の意味はそれだけに留まらない。

リアン・ドラサールはひとりではない。虹の調査団は彼ひとりでは出来ていない。リュイン、マキア、テラ、リオノーラ、アンネマリーにグモモ、アリア、頼りになる仲間たちがいて始めて成立する。

リアンはダスト相手には無力だ。

レリックの性質上、女性にしか発現しないその力をリアンは持ち合わせてはいない。

オラクルという異例の力を行使できはすれどそれもテラが側にいてこそ。

戦闘のほとんどはリュインやマキアに頼らざるを得ない。

戦闘で負傷すれば治すことが出来るのは癒やしの力を持つリオノーラだけだ。

虹の調査団として活動するためにはミストレアとネオラントの両世界を自由に行き来するためにブルーバードを操縦できるアンネマリーは欠かせない。

野宿をする際はグモモの中に広がるグモトピアは便利で有効であり、その管理と団員たちの身の回りを世話してくれるアリアは心の支えにもなる。

誰かひとりでも欠けていれば虹の調査団は今日まで活動を続けてこられていない。

互いが互いを支え合い、補ってきたからこそ虹の調査団は今があるのだ。

『盤上を見る』という言葉にはそこに起きた事象に限らず、『そこにいる者たち』も含まれていた。

そのことを体を張ってでも止めてくれたリュインに教えられたリアン。

仲間の頬にそっと触れ、涙を拭う。

「……ごめん」

短く謝る。

その顔には穏やかな笑みが浮かべられ、焦燥の色はもう見られなかった。

それを見てリュインも安堵したのか湛えていた涙を溢れさせるも笑顔で。

「ううん。色んなことが起きて焦っちゃったんだよね。大丈夫。リアンはひとりじゃないよ。今はたくさんの仲間がいてくれるから。きっとどんな問題だってみんなが力を合わせれば乗り越えられるよ。それに私たちはどんな時でもリアンの味方だよ？だから全部ひとりで背負い込まずに今は出来ることからやっていこう。ね？」

その優しい微笑みから語りかけられ、リアンはただコクリと頷くのであった。

「？行かないのですか？」
「ぐもごっくん！…ぐももっ!?」

～ｂａｌｍｎａｓｂｔ　ｌａＫａｒｍａｒａ～　前兆その４

２８

改めて、今後の方針について話し合う短髪団長たち。

現況を精査し、整理をした結果、当面はバウム王国内にてリアンとリュイン、テラは調査を行うものとすることとした。

リアンたちがバウム王国に滞在中の間は並行してマキアとリオノーラ、アンネマリーはネオラントにてジェイニーの捜索を続けてもらい、情報を集めていく。

地道な方法ではあるもこれが現状、虹の調査団が取れる最良であることに変わりない。

方針が固まり、バウム王国の外で待つ仲間たちに情報の共有を図るために一度短髪団長たちはブルーバードまで戻ろうと立ち上がった時だった。

「きゃあっ！」
店の外から悲鳴。
何事かとリアンたちは顔を見合わせてすぐさま声のした方に駆けつける。
店を出ると道の真ん中で人だかりが出来ており、そこへ近づく。
その中心にいる人物を見ると、数人がかりの大人がひとりの子どもを押さえつけているところであった。
最初は子どもが盗みを働いたものと考えた短髪団長であったがどうも数人の中のひとり、無精髭の男の様子がおかしいことに気がつく。
「返して！ねぇ、返してよ！」
取り押さえられている子どもは尚も叫びながら必死に無精髭の男が持っている物に向けて手を伸ばしている。
しかし、無精髭の男はふるふると体を震わせており、子どもの声に耳を貸す様子がない。
「なぜネオラントの物がここにある……!!」
何事かを呟くとキッ、と突然子どもの方を睨みつける。
「小娘！答えろ！これをどこで手に入れた!?」
手に持った物を忌々しげに見つめながらに無精髭の男は突きつけるようにして恫喝

を浴びせ掛かる。
「ひっ！」
「答えろと言っているのが分からんのか!?」
大の大人複数人に取り押さえられたまま詰め寄り問い詰められるというのはまだ幼い子どもにとっては恐怖でしかない。
恐怖で震え、涙を流す子どもに尚も問い詰め、耐えかねた子どもは震えながらに口を動かす。
「パ…パパから……おみやげって……」
それを聞いた無精髭の男は。
「……っっ!!なんということだ!!」
と、突如芝居掛かったかのように天を仰ぎだす。
そして騒ぎを聞きつけて集まってきた民衆の方に向けて声高々に告げる。
「見ろ！これがネオラントのやり方だ！奴らは〝かがく〟という我らとは異なる技術を用いて密かに我らの生活を脅かそうとしていたのだ！友好的な態度の裏ではいつミストレアの寝首を掻こうかと虎視眈々と狙っていたのだ！その証拠としてこんな無垢な少女の手にも渡るネオラントのペンダントには盗聴器が仕掛けられていた!!」
「っ!?!!」

「なっ!!?」

無精髭の男の言葉に周囲を含めリアンたちにも走る。

男が掲げるネオラント製のペンダントはネオラントではよく見かける品であり、色彩豊かでミストレアでは難しい精細な装飾も施されていることからミストレアへの土産としても人気の高い品々のひとつだ。

だが、子どもの手に収まるのが精々な小さいペンダントに盗聴器が仕掛けられているかどうかは遠目であることも含めて短髪団長たちでも分からなかった。

確かに何度かネオラントでの活動をする際にリアンもリュインも〝盗聴器〟という単語を耳にしたことはある。

その際一度マキアにどうすれば盗聴器を見つけられるのかとリアンは聞いたことがある。

青髪制服が言うには「難しい」と。

『ネオラントの科学技術は日々成長と進化を繰り返してるからね…昨日あった技術が今日には過去のものとされているのもざらだわ。あたしが保安省に勤めていた時も盗聴器の種類なんて数百とあったわよ。中でも対象の食べ物の中に忍ばせて体内から盗聴するなんて奇抜な手段を取るものもあるくらいだし……それでも見つけるには発見器で怪しい電波を探るしかないわけだけど……肉眼での盗聴器発見はプロでも見つけ

られないわ。……え？体内に入った盗聴器はその後どうなるのかって？…そんなことあたしに聞かないでよ!!バカッ！』

そういうこともあり、仮に今ここに盗聴器に詳しい者がいても見ただけでは発見には至れない。

そうなるとあとは発見器で見つけるしかないのだが男の手にはペンダント以外にそれらしき物があることは確認出来ない。

そして無精髭の男はミストレア人。

科学に精通するネオラント人でもひと目見ただけでは分からない盗聴器の存在をミストレアの者が分かる道理があるのだろうか。

そこから導き出される答えはひとつ。

「酷い言いがかりだ……」

短髪団長は今にも駆け出したい気持ちを歯噛みして押し殺しながらペンダントを掲げる無精髭の男を見据える。

おそらく純白ワンピースがここにいれば無精髭の男は真っ黒なオーラを出しているのが見えていたのだろう。

そう、男が言うことは全て詭弁であり、今握られているペンダントには盗聴器など仕掛けられていない。

そもそも不特定多数に配る盗聴器など数が多いだけで何の効力もない。ただ手間なだけである。

だが、男にとっては仕掛けられていようとなかろうと関係はなかった。なぜならば。

「なんて汚い奴らだ！」

「最初から私たちを騙していたのね！」

「ネオラントは敵だ！」

「許せない！」

「ネオラントの侵略を許すな！」

次第に集まってきた民衆たちからネオラント排斥の声が高まっていく。

「な、なにこれ…？」

その様子に動揺する短髪団長たちを余所に声は徐々に増え、感化され、同調圧力に負けた者も出始め、やがて一体感が生まれる。

これこそが男の狙いであった。

ネオラントの科学については疎いミストレアのバウム王国民にとって、無精髭の主張が虚偽であるかどうかの判断はつかない。

さらにはネオラントへの疑心も募っている今ではありもしない事実を風評されてもミストレアの者はそれを容易に信じてしまう。自然ネオラントへの疑惑は強まりネオ

ラント排斥に対して懐疑的であった者たちもその意識を半ば無理矢理変えさせられ、デモの一員に組み込まれていく。
実に効率的で狡猾的なやり方。
「返して……返してよぉ……」
涙ぐみながら訴える子どもの悲痛な叫びも、活気付いた民衆たちの声にかき消されていくのだった。
その場のほぼ全員が同調し声を揃えて掲げる様を見て無精髭の男は満足そうに眺めるとさらに拍車を掛けようと畳みかけていく。
「聞こえているかネオラント！我らは決してお前たちに屈したりはしない！誉れ高き伝統を持つミストレア人を甘く見るなよ！ネオラントぉ!!」
そんな誰も聞いていない宣戦を声高々に掲げ、そして持っているペンダントを地面に叩きつけ――。
「やめてぇっ!!」
子どもが手を伸ばすも――。
「リュイン！発光だ!!」
「分かった！」
ひとつの声と共に放たれたのは閃光と見紛うほどに眩ゆい燈光。

「!?」
突如出現した光にその場にいた民衆たちの視界は一時白へと染められる。
それは無精髭の男も同様で腕で光を遮っていると――。
バシッ！
いきなり何かに手を弾かれた感覚。
そこで男は持っていたペンダントが手元から消えたことに気づくも光が眩しくてそれがどこにあるのかが分からない。
次第に光は弱まり、民衆たちの視界が開けていくと、その中心に立つように目深に外套を被る人物――リアンがそこにいた。
その手にはペンダントを握りしめて。
「おま…」
「あたしのペンダント！」
光の影響で拘束が解けていた子どもは我先にとフード団長の元へ駆け込む。
リアンは子どもの目線になるように膝をついてしゃがむと、その手に取り返したペンダントを握り込ませた。
「大事にするんだよ」
「……うん！」

ペンダントが戻りパァッ、と明るい笑顔になる子ども。
それを見てフードの奥で微笑みを浮かべ、頭を撫でる。
「お前は誰だ!?」
そこに無精髭の男の怒号が飛んでくる。
見ると息を荒くして血相を変えた様子でリアンを睨みつけており、演説の邪魔をされたのを相当にお怒りの様子であった。
「言えっ！お前は何者だ!?なぜ邪魔をした!?」
「虹の…」
と、言いかけたところでフード団長は慌てて口を閉じる。
現在ミストレアとネオラントの関係に亀裂が生じ始めたところにその中立とも言える虹の調査団の者が、しかもミストレア人の団長である自分がここでそれを明らかにすれば現場の混乱は避けられないどころか最悪、両世界の関係を悪化させかねない。
ドレスの騎士との約束もあるため（もうほとんど破っているが）自ら公言することは出来ず、どう答えたものかと決めあぐねていると。
「まさか……ネオラントの!?」
「え？」
その時どこからか疑惑の声が飛ぶ。

「そうだ…ネオラントの物を守るなんてネオラント人以外考えられない！」
「敵よ！やっぱり敵なのよ！」
「ネオラントの侵攻だー！」
「ネオラントの侵攻を許すなー!!」
疑惑は確信に変わり、確信は怒りへと変貌する。
思わぬ形での敵意を向けられたことに戸惑いを覚えつつもこの状況をどのように切り抜けるか思案するフード団長。
正体を明かせない以上逃げるの一択しかない。しかし、リアンが立つ場所は民衆たちが立ち並ぶ輪の中心地で囲まれた状態。逃げるにしても容易ではないだろう。
そうなると戦闘は避けられなくなるわけだがそもそも同じミストレア人同士で争うなど論外だ。無益な戦いはそれこそ状況を泥沼化させる。
こうしている今も選択の時は差し迫っている。
その内騒ぎを聞きつけて王国守護騎士団もここに駆けつけてくるだろう。そうなればいよいよ追い詰められたことになる。
今自分の判断が後のミストレアとネオラントの関係に影響を与えるものになると意識すると忽ち動きが鈍くなる。
あらゆる葛藤が渦巻く中で、ふとリアンの手にあたたかいものが触れる。

「……」
見るとペンダントを握った子どもが震えながらに手を掴んでいた。
過去にミストレアとネオラントは互いを受け入れられずに争ってきた。
和平を結び、平和が訪れた今でもそのわだかまりが消えずに残っている。
だが、リュインは言っていた。
「私たちの活動でネオラントの人たちも少しずつだけどミストレアに理解を示してくれる人が増えてきてるんだって！凄いよね!?私たちがふたつの世界の架け橋になってるんだよ!!」
わだかまりは消えない。
過去の遺恨はこれからも残り続けるだろう。
互いが真の意味で理解し合うなど簡単なことではないだろう。
それでも、歩み寄る歩幅は少しずつではあるが大きくなっている。
それがどんなに小さくか細い光でも、その輝きを失ってはいけない。
失わせない。
リアンの覚悟は決まった。
「リュイン！もう一度発光を――」
時間は掛かるかもしれない。

かなりの遠回りとなってしまうのかもしれない。
それでも。
それでもミストレアとネオラント。
ふたつの世界が共に歩み寄れる世の中になれる光が灯り続ける限りは――。
「静まれ!!」
張り上げるような美声がその場に轟く。
しゃらん、と錫杖にも似た杖を鳴らし、威風堂々の立ち居振る舞いで歩み寄る、バウム王国とは違った民族の装いの人物。
その美貌に魅せられた者は先程までの憤りが嘘のように惚けた様子で見惚れていた。
その口からまたも美声が発せられる。
「憶測だけで物事を判断するは己が無知であると周りに吹聴すると同義であるぞ！ぬしらは自らを愚か者と断ずるのか!?」
その一声だけであれほどの気勢が忽ち引いていくのを直に感じるリアンたち。
無精髭の男も同様で、首を横に振ると慌てた様子で反論する。
「だ、だがその者がネオラントの者でないかどうかの確証などない！違うと言うのならばそのフードを取って顔を見せてもらおうか…」
「愚か者めが!!」

パシンッ、と張り上げた美声により平手を受けたかのような衝撃が男に飛ぶ。
「この者は妾の客人！故あって人前にその顔を晒せぬ事情がある！そんな事も分からぬのか!?」
「い、いやそんなこと言われても……」
有無を言わさぬ勢いで身勝手な主張を叩きつけられる無精髭の男。
言ってることは支離滅裂であるにも関わらず、その美貌を前にして何も言い返せないでいる。
庇ってもらっているリアンであるが少しだけ男に対して気の毒に思うのであった。
「よいか！よく聞け民衆よ！」
やがて完全に萎縮してしまった男を視界から外し、今度はその端正な顔立ちを大衆に向ける。
「今後、妾の客人にあらぬ誤解から無礼を働く不届き者が現れればその時はこのカーマラ第三王女である妾を敵に回すものと心得よ!!妾の客人を侮辱はカーマラの侮辱と同義であると！今日は妾の美貌に免じて見逃してやろう！分かった者から早々に立ち去るがよい!!」
張り詰めた美声は瞬く間に観衆たちの耳に届き、やがてひとり、またひとりとその場から去っていく。

ついには無精髭の男たちもその場から去り、残ったのはリアンたちだけとなった。
「す、すごい……あれだけの人たちを言葉だけで……」
一部始終を見ていた赤ポニテは感嘆の音を漏らしていた。
それはフード団長も同じで。
「あ、ありがとう……パ」
「会いたかったぞぅ♪主様♪」
むぎゅっ。
突如リアンの視界は柔らかいもので覆い尽くされた。
「ふごぉっ!?」
「えぇっ!?」
突然の出来事に短髪団長と赤ポニテも面食らう。
「まったく、相変わらず無茶をするな主様は。まぁ、そこが主様の良いところであり愛いところでもあるがな♪もっと近くに寄るがよい♪」
それ以上近づくことなど出来ないのに尚もリアンの顔に自身の柔らかいものを押し付けていく。
その無邪気さの行動からは先程の威厳ある立ち居振る舞いを想像することは出来ない。

むぎゅーっ、とさらに顔全体を覆うように柔らかいものを押し付け、短髪団長に幸せの苦しみを与えていく。

「ちょ、ちょっと!!そろそろリアンを離してください!」

本格的にレッドゾーンに突入しかけたところを契機に慌てて救出に入る赤ポニテ。

だったが。

「なんだ?おぬしもしてほしいのか?よいぞよいぞ♪おぬしらならば妾はいつだってウェルカムよ♪」

「え?いや、私はむぐぅっ!?」

そのままリュインも洗礼を受けることとなるのであった。

赤ポニテが身代わりになることで生還を果たした短髪団長は息を整えてその人物に向き直る。

「こ、こっちも会いたかったよ……パトラ」

「ん?そうかそうか♪」

ミストレアとネオラントの未来に暗雲が立ち込める中、そこに輝くひとつのか細い輝きに引き寄せられるようにして現れた美の化身。

まだ混乱が続くバウム王国の空の下で、絢爛豪華の輝きを持つ我が儘な王女様は無邪気に美笑を浮かべるのであった。

「むごーーーーっ!?」
「次は私たちもお願いします」
「ぐもぐも♪」
「よいぞよいぞ♪」

～ｂａｌｍｎａｓｂｔ　ｌａＫａｒｍａｒａ～　進展その１

２９

パトラ。

絢爛の唯美独尊。

美を信じ、美に生きる天衣無縫の自由人。

その実態は砂と文化の国、カーマラ王国第三王女にして最高神官という要職にも就くミストレア全土の観点からしても重要な立ち位置に座す人物である。

しかし、等の本人は己の肩書きを虚飾とみなし、それによって自分の価値を見出されることに辟易している。

彼女曰く、美とは着飾るものではなく生き方そのものである――と、言うがその内心は表に現れることはなく、普段の振る舞いは自由奔放、傍若無人そのもの。

さらにはお節介焼きな上に気に入った相手にはからかって遊ぶという難儀な性格を

しており、彼女が言う「美」に振り回される者も少なくない。
曰く、「それも美である」と。
…その言葉の真意性に保証はない。

「ほら、こっちであるぞ主様♪」
しゃんしゃん、と煌びやかな装飾を鳴らし、威厳を示すようなパレオをマントのようにたなびかせて歩く王女様。
カーマラ人特有の褐色肌に併せ万年稀に見る美貌も相まって、その風貌からはまさに絵に描いた美神そのものである。
だがその内面までは絵画の通りとはいかない。
いかなる絵描きでも「心」までは描き写せないように――。
行動言動は傍若無人そのままで子どもの無邪気さまで併せ持ったかのように振る舞い、さらにはそれを押し通す。
今も美の顕現者様はその決して多くない布面積の服装で、その身体を惜しみなく短髪団長の腕に押し付けている。
「あの……パトラさん……もう少し離れて歩いてくれると助かるのですが…」
腕に確かな感触を感じながら赤面団長はささやかに抗議する。

「ん？なんだ主様よ？」
「いやあのもう少し離れて」
「妾はこのままでもよいぞ♪むしろもっと近づくがいい♪」
「え、いや、ちょっ」
そう言うとパトラは赤面するリアンの肩に手を伸ばすとそのままより密着度の高い体勢になる。
端から見ればもうほとんどふたりは抱きあっているようにしか見えない。
「あ、あの…」
今度は顔全体に柔らかい感触を感じ取り、それまで抗議の声を上げていた赤面団長の顔は湯気が出そうなまでに熱を持ち思考が止まる。
その反応を面白がるように美の顕現者様はなおも密着を続け――。
「むむむむむむ……!!？」
その後ろでは赤ポニテが頬を膨らませてすごい形相で睨みつけていたのだった。
なによリアンったら！あんなにデレデレしちゃって！
リュインの嫉妬が背景に炎として目に見えるほどに煌々と燃え盛る。
「リュイン、燃えてますね」
「ぐも…」

前は天国、後ろは地獄の板挟みに遭ったリアンに生きた心地はなく、顔は赤面していると言うのに先程から冷や汗が止まらない。
その状況すらも美の顕現者様は楽しんでおり、次はどのようにからかおうかと悪戯心を働かせ初めたところ――。
「パトラ様!!?」
その空気を破るように絶叫に近い叫び声が通る。
声のした方からはリアンたちに向かって早足気味に近づく女性の姿が。
その女性の装いもパトラに近いものを感じさせ（尤も、パトラのように布面積が少ないわけではない）、見た目からしてパトラの従者であることが窺える。
「困ります！今は外はデモなどが横行する事態にまで切迫している状態ですのに勝手に出歩かれては！せめて護衛のひとつはつけてから……」
開口一番にパトラに苦言を申し立てる女従者。それに対し美の顕現者様はというと。
「何を言うか。妾の美しさの前に護衛などいらぬて！」
と、自信満々に胸を張って言ってのける。
「～～～～～～～っ!!?!!?!!?あなたはまた……!!?!!?!!?」
それを聞いた女従者は必死に何かを押し殺すように自身の体を震わせる。
普段からパトラの従者として付き従っているのであろう彼女の気苦労が垣間見えた

気がしてリアンとリュインは心の底から同情と畏敬の念を送るのであった。

「……時にパトラ様。この者達は？」

幾許かの葛藤に耐え忍んだ女従者はそこでようやく短髪団長たちの姿を捉える。

「妾の友人である♪そこの道で拾ってきたのだ♪」

「…そんな捨て猫を拾ったみたいに……」

自由奔放な美の顕現者様の明るい美笑を浮かべるのに対し、気苦労の絶えない女従者は閉口する。

その様子にリアンとリュインは改めて心の底から同情と畏敬の念を送るのであった。

やがて、コホン、と咳をひとつすると身だしなみを整えカーマラ式挨拶をする女従者。

「お見苦しいところをお見せ致しました。私、パトラ様にお仕えする従者の者です。以後お見知りおきを」

その流れるような洗練された挨拶に短髪団長含め赤ポニテも思わず目を奪われる。

「これこれ、主様よ？妾の前で妾以外の者に見惚れるものでないぞ？」

そう言ってパトラはリアンの顔を持つとグイッ、と無理やり自分の方へ向けさせる。

自身の指で短髪団長の顎を固定するように持ち上げ、互いの距離も目と鼻の先にあり、そのまま唇も――。

「だ、ダメーーーーーーッッッ!!?!!?!!?」

堪らず赤ポニテがふたりの間に割って入る。
「ほう？」
それを美の顕現者様はさも面白げに見入る。
「パトラ様……お戯れも程々になさってはいかがです？」
側で忠言を述べる女従者に肩をすくめたパトラは皆より先に一歩前に出る。
「分かった分かった。では妾の部屋へ参ろうか。その者たちも連れて参れ」
「なっ……この者たちを招き入れるのですか？」
パトラの立場からすれば不用意に外の者を自室に招き入れるという行為はカーマラの第三王女としても最高神官としても容易に出来るものではない。
それは彼女自身がカーマラ王国にとってもミストレア全域に対しても重要人物であり、また沽券にも関わる訳でもあるのだが。
「もちろんだ♪」
自由の美神にその常識は元よりない。
「……かしこまりました」
白目を剥く女従者を横目に奔放不羈な振る舞いをする美の顕現者は手招きする。
「さぁ、行こうぞ主様♪妾の部屋へ……シャルミラが待っておる部屋へな♪」

～ｂａｌｍｎａｓｂｔ　ｌａＫａｒｍａｒａ～　進展その２

３０

「んっ……ふっ！…あぁっ！」
室内に艶かしい声がこだまする。
「あっ！……んぅっ！あぁっ！」
声の主はその声を恥じらうように必死に押し殺そうと奮闘するも身体は正直で――。

シャルミラ。
カーマラ王国の星占いを司る司祭として国に仕えていた上流一族の箱入り娘。
代々優れた占星師で、レリック使いでも秀でていた一族の家風に則り、シャルミラ自身も星読みの知識とレリックの扱い方を修めている。

その後、自身の占いにより生涯の伴侶となる人物を探すために家を出る。虹の調査団とはその婿探しの末に出会い、以来行動を共にするようになった。
星占いとその実力は確かではあるのだが、本人自身が極度のあがり症という致命的なまでの臆病な性格をしているために婿探しも含めその他諸々前途多難である。
「シャルミラ様！もう少しです！」
そのすぐ側で彼女に向かって激励の言葉を掛け続ける小さな召使がひとり。

シリーナ。
シャルミラに仕える召使であり隠密。足技を得意とする拳法家の少女。
孤児として路頭を迷い込んでいたところを拾われ、以降召使の仕事と一般常識を学ばせてくれたシャルミラの主家に心からの忠誠を誓い、従事する。
婿探しの旅へと家を出てしまったシャルミラを追いかけてシリーナ自身もその旅に追従する形となった。
主人思いであるが故にたまに暴走しがちではあるが全てはシャルミラのためと本人は言う。
「シ、シリー……ナ！こ、これ以上は……む、り……だよ！」
諦念の音を上げるシャルミラに対し、小さな召使は心を鬼にするが如く首を横に振

る。

「何を仰いますかシャルミラ様！ようやく…ようやくここまで来たのですよ!?今ここで辞めてしまえば今までの行いは水泡に帰すのですよ!?あと少しで済むのです！でしたらばここは最後までやり切るのみです！」

「で……でも…お……！」

息が荒く、涙目に訴えかけるも小さな召使は被りを振る。

「次行きます！…左足…赤！」

「あっ……赤ぁ……!?」

シリーナからの非常でありつつも愛のある鞭に涙を目に湛えながらもシャルミラはその言葉の指示通りに応えようとする。

しかし、そこである重大なことに気付く。

「シ、シリー……ナ……！こ、これ……！このまま足を……置い…たら……！そ、その……!!」

それ以上は自分の口から言うのも憚られるのか言い淀む。

「シャルミラ様！今は恥などかき捨てるのです！」

そこに小さな召使から発破が掛かる。

「この苦行を耐え忍んだ先にはきっとシャルミラ様が望むものが手に入るはずです！

そのためにも今は恥など怖れないでください！どうか！どうかここは私の言葉を信じてください！シャルミラ様！」

幼少の頃からの付き合いでもある主人と召使の関係であるふたり。

その小さな召使からの言葉に突き動かされるようにシャルミラは意を決し――。

「～～～～～～～～～～～っっ‼？」

そして――。

「ど……どう……？シリーナ……？」

身体を震わせながらも確認を取る。

「……っ‼？シャルミラ様！そのまま！そのままの体勢で五秒耐えてください！」

手足は震え、限界も近いシャルミラ。

だが、己の夢のため、宿願を果たすという使命感が体を床に付けることを許さなかった。

「……２……１！」

そしてカウントがゼロに差し掛かり――。

「…０！やりました！やりましたよシャルミラ様！これでシャルミラ様は『恋結之秘儀』を修めました！これでリアン様とも――」

「え、僕？」

はた、と。
ふたりの主人と召使は声のした方、部屋の入り口に目を向ける。
そこにはパトラを含め、リュイン、テラ、グモモ、――そしてリアンの姿が。
一方、シャルミラはというと。
いつもの装いとは一風変わり、桃色の生地が肌にピッチリと吸い付くように張り付き実に動きやすい格好――レオタード姿で、床に敷いてある赤や青など四色に塗りつぶされた円が描かれたボードの上で両の手を後ろに、右足と左足はそれぞれ端の方にある色の上に乗せ――リアンたちを迎えるように両足を広げた体勢となっていた。
「パトラ様……!?それにリアン様たちも!?」
突然の訪問者に驚きを隠せない小さな召使。
その現場と反応に何やら見てはいけない一幕を目撃してしまった罪悪感に苛まれるリアンたち。
気まずさを伴わせながらも短髪団長は。
「や、やぁ。久しぶりふたりとも。その……えと……元気そうでよかったよ」
なるべく無難な挨拶と共に普段となるべく変わらないような表情を心掛ける。
その短髪団長のひくつく笑顔を見て放心気味だったレオタード娘は意識を現実に引き戻すと今起きている現状と自分の体勢がどのようなものになっているのかを瞬時に

理解するとたちまち羞恥により紅潮して褐色肌の顔色が熟れた果実かのように赤く染め――。

「きゅう……」

バタンッ。

「シャルミラ様⁉？シャルミラ様しっかり‼？シャルミラ様⁉？」

「だ、大丈夫⁉？シャルミラ⁉？」

己の羞恥のキャパオーバーによりシャルミラはそのまま気を失ってしまうのであった。

周りが介抱に向かう中でテラは床に敷かれたボードに目を引かれる。

「パトラ、これはなんですか？」

「んむ、それはカーマラ式ヨガとツイスターゲームなるものを掛け合わせた『カーマラ式ツイスターヨガゲーム』であるぞ。それぞれが決まった手順で描かれた色の円に手足を置いていき、一番早くヨガのポーズを取れた者が勝ちというヨガの複雑性とゲーム性を兼ね備えたものであり、実に画期的なものである♪さらには妾が監修の元に組み込んだ直伝の運気上昇の秘儀もあり、それを行うことで金運、仕事運、無病息災に恋愛運といった出会いの――」

「シャルミラ！しっかりして！目を覚ましてくれ！シャルミラーーーーッ‼？‼

?!」

念願だった探し人であるシャルミラに思わぬ形で再会を果たした短髪団長たち。

しかし、あまりに唐突すぎる再会はそれこそ思わぬ形でのものとなり――。

シャルミラ自身が目を覚ますのはそれから小一時間ほど先のこととなる。

～Ｓｙｍｐｔｏｍ～　揺れる水面　その１

３１

キルシュバウム王国・キルシュバウム城。

荘厳と様式美を兼ね、要人を守る堅牢さも備えており、国の象徴としても機能するミストレアの中でも歴史と伝統が長い建築物。

人によっては崇拝の対象とも言えるこの城塞への立ち入りは一般の者は基本入れず、如何に王国を守護する守護騎士団と魔法師団といえども限られた者しか王室への出入りを許されない。

王室・謁見の間。

「ふざけるな!!?」

煌びやかな内装で来賓を迎える場であるその広間で後ろの髪を結び端正の整った顔立ちでありながらも威厳ある風格を漂わせる重厚な鎧を身に纏う女性騎士が澄んだ声

を張り上げて広間を轟かす。

アセリア。

バウム王国守護騎士団団長。

王国最強の騎士として名高い四賢人のひとり。

王都、国を守る者のトップとして責任感が強く、常に上を目指す姿勢と騎士道精神には人心を自然と掴む程のひたむきさと強さがあり、人望も厚い。

彼女に憧れて騎士団に志望する者も多く、誠実な人柄に惹かれて彼女の元には人が集まっていくのだが――。

この時ばかりのアセリアからは他の者を近づかせないような気迫めいたものを感じさせられるのであった。

まるで戦場さながらの殺気を放ち、誠実な騎士は目の前の人物を睨みつける。

「アセリアさん落ち着いてください。女王陛下の御前ですよ。仮にも王国の最後の砦とも称されるあなたが冷静さを欠くなどそれこそ問題なのですよ。今は慎んでください」

そのすぐ側で緑を基調とした貴族の出で立ちをした服装の上から鎧を身につけ、頭に

はこの国の大総督という役職を象徴する戦場を見渡す鳥をモチーフにした軍帽を被る知性溢れる黒髪ロングツインテールの女性。

カロルの忠告は功を奏し、今にも腰に差した剣を抜きかねない勢いだった誠実な騎士は己を抑えて冷静さを取り戻したかのように取り繕うがその憤りまでは隠せてはいなかった。

その様子にやれやれと緑の軍師は肩を竦めると、そのまま視線を現在進行形でその誠実な騎士に敵意を向けられているにも関わらず余裕ある笑みを崩さない気取った態度を見せる人物に目を向ける。

「アルドルフさん。先程の発言に関してですが私からも説明を願いたいところです」

声を掛けられた人物――紫の髪に社交場に出るような中世の礼服を纏った身なりの整った男性――バウム王国宰相でありアセリア、カロルと並ぶ四賢人のひとりであるアルドルフは余裕の笑みを浮かべたままに口を開く。

「説明も何も……言葉通りの意味ですよ」

そこには含みもあるような雰囲気を漂わせて。

「現在各地で執り行われている貴族たちの独断による武器の製造と領民たちへの徴兵はこのまま継続、義務化させ、ミストレア全体の戦力の強化を推進致します」

「……っ!!?」

紳士な宰相の発言にまたも激情に駆られそうになるアセリアを目で制して緑の軍師は続きを促す。

「……理由としましては以前私自らがネオラントへ視察に向かった際――」

「あぁ、あの珍しく貴方以外の四賢人三人の意見が珍しく一致した近年稀に見る奇跡を起こしたにも関わらずそれでも押し通した観光の時ですね。何か面白いものでも見れましたか？」

「……コホン、視察へ向かった際――」

そこでアルドルフは自身が身をもって体験した出来事――元封鎖エリアＢ３『クレーブス』の一件を話した。

内容自体は以前の報告により四賢人全員に情報を共有されてはいるが、ここで女王のいる前で改めて語って聞かせることに意味があった。

そしてそれが狙いでも――。

「たしかに封鎖エリアＢ３……クレーブスのことで情報局の脅威はネオラントに留まらずミストレアにも及んでいることは分かりましたが……それとミストレア全域の戦力強化に何の関係が？」

カロルはさらに続きを言うように促す。

「情報局なる組織は政府直属の組織でもあり、ＤＣ計画というレリック保持者の増産

を目的としており、実験の被験体を集めるためにミストレアからも被害者が出ていることからもその規模は並のものでもなく、さらにはそれほど大きく動いているにも関わらず表社会には決して露出することもなく…」

「つまり、どういうことですか？」

緑の軍師は要点を聞く。

「ネオラントの政府中枢がミストレアに戦争を仕掛けようとしている可能性が高い、ということです」

「バカな‼？」

そこに待ったを掛けるようにアセリアが声を荒げる。

「何の確証もない憶測だけの判断で国民に労苦を強いるというのか⁉？宰相の身でありながら自分が何を言っているのか分かっているのか⁉？アルドルフ‼？」

その反論にそれまで余裕の笑みを崩さないでいたアルドルフの顔から笑みが消え。

「……言動には注意を払いたまえ。騎士団長殿」

その目を鋭く捉える。

「確かに私は騎士団長殿と違って由緒ある血筋の生まれではない。しかし貴族制という制度の偏りを無くすために国の声、貴族ではない民衆の声を不意にさせないために誰もが意思尊重される社会を作るために支持され、宰相という役人に就き、その働きを認

められて四賢人という誉れ高き称号を賜るに至ったのだ。その私へ向けての疑心の声を上げるということは平民への疑心ひいては平民を差別していると同義。王国を守護する者の団をまとめる者がしていい発言とは思えませんな」

「その民たちを危機へと追いやろうとしているのが自身であることに自覚はないのか⁉?今と同じ発言を⁉?自分の口から民衆へと直接伝え聞かせられるのか⁉?」

議論の熱は苛烈さを増していく。

「ちょっとお二方。そこまでに」

「では問いますが騎士団長殿。現状鑑みるに今バウム王国内の暴動と近辺での貴族の暴走の問題をどのように収束させるというので?現在守護騎士団は暴動の規制と貴族への勧告に向けて動いているようですが一度流れた川の水を堰き止めたところでその水の勢いを殺せなければいずれは決壊し、洪水を引き起こすのだということをお分かりでいるのか?」

「こちらこそ逆に問おう!貴族の暴走に目を瞑り民たちへの過労苦は仕方なしとする判断が本当に国のため、国民のためになると本気で思っているのか⁉?もはや国民たちの限界は超えているのだ!そこに火に油を注ぐようなことをすればそれこそ暴動激化の引き金になりかねん⁉?」

「落ち着いて」

「要は無益な労働と過酷な訓練で徒らに民を疲弊させることに問題があるのであろう？ならばそうさせないために国から指示する者を派遣して現場を監督させ各工程ごとの無駄を省かせて効率化を図ればよろしい。さらには兵役に従事した者にはそれ相応の応酬を与える形で――」

「そういう問題ではないと言っているのが分からないのか⁉？そもそも確証もない段階で徴兵などすればそれこそミストレアがネオラントに戦争を仕掛けようとしていると誤解を招きかねないのだぞ⁉？二世界大戦での同じ過ちを繰り返すことはあってはならないのだ‼？」

「確証というのであれば先の親交会議が行われたリブラでの倉庫にあった爆破事件で露呈したネオラントの兵器こそ――」

「あれこそ未だ真相が不明な点が多いのだぞ‼？爆破を行なったのも――」

「静粛に‼？‼？‼？」

白熱した熱を冷ますようなカロルの一声。

ピシャン、と打ち水を浴びたかのような衝撃に議論していたふたりの四賢人も静かになるのだった。

それを見て緑の軍師はため息を吐いた後に。

「…ひとまず一度休憩にいたしましょうか。それまでに両名頭を冷やしておいてくだ

さいね」
と、提案する。
「……あぁ」
「……失礼」
その提案にふたりの四賢人も反論することはなく。
「女王陛下もよろしいですか？」
最後に確認を取るようにカロルは御簾の向こうにいる人物に声を掛ける。
「認めます。それではこれより小休憩を挟みます。今より１０分後に再び各々ここに集まるように。それまでは休息を」
御簾の向こうから聞こえる声に三人の四賢人はそれぞれ忠誠の儀で返すのであった。

～Ｓｙｍｐｔｏｍ～　揺れる水面　その２

ユニティア《カーマラ編》２５

３２

引き続き、謁見の間にて。
ふたりの四賢人が退室し、その場に誠実の騎士、御簾の向こうで女王のみが残る。
「ふぅ…」
先程の張り詰めていた緊張をほぐすようにため息をつくアセリア。
すると御簾の向こうからくすくすと上品な笑い声が。
「ふふっ、あなたがあんなに取り乱すなんて久しぶりね？アセリア」
どこか子どものような純朴さを感じさせる声を聞いて誠実な騎士もハッとしたように肩を震わせる。
「……これは失礼しました。女王陛下」
さすがは王国を守護する騎士団長とも言えるのかその一声を聞いただけですぐさま

いつもの毅然とした態度の戻り、先程の緩んだ姿勢など見せない。
それこそ王国を守護する者としては正しい姿であるもこの国ではただひとり、その姿勢に不服を申す者がいた。
「もう、アセリアったら。ふたりきりの時くらいは昔みたいに『リーゼ』って呼んでくれてもいいのよ？」
「……いえ、そういう訳にも」
「相変わらず頑固なところは変わらないのね」
くすくす、と再び御簾の向こうから上品な笑い声が響く。

民や貴族、果ては四賢人さえも崇拝と畏敬の対象とするキルシュバウム王国の実質頂点に君臨する人物。
クローネリーゼ女王。
正真正銘王家の血を引いており、王国の方針を決める最高決定権を有する。
そのため如何に国の代表たちである四賢人であっても彼女の鶴の一声で全ては覆る。
王国の行く末は彼女ひとりの言葉で決まるのだ――。
アセリアとは幼い頃からの友人関係を築いており、今のように互いがまだ要職に就く前はふたりで遊ぶ仲でもあった。

今や互いに国の重鎮とも言える立場で迂闊な行動も控えなくてはならなくなったふたりであるのだが時折、特に女王はアセリアとふたりきりになると隙を見ては昔のような関係の振る舞いをしてみせる。

それが誠実な騎士の頭を悩ませる悩みのタネでもあるのだが。

はぁっ、と未来を憂うかのようなため息をつく。

「あら、随分とお疲れの様ですね。なんでしたらあなたも休んできていいのよ？アセリア」

その原因を生み出している張本人であるという自覚がないことに更に頭を痛めそうになるもアセリア自身はその様な態度をお首にも出さずに話題を変える様に話す。

「……女王陛下はどのようにお考えですか？」

「考え、というと？」

御簾の向こうから漂う気配が変わる。

「アルドルフ宰相の新たな政策……武器製造の継続と徴兵化です」

先程の議論を思い出してか誠実な騎士の拳が強く握られる。

「あのような政策……私にはとても承服致しかねます……」

「……」

そこでふたりはしばらく無言になる。
女王は女王としての答えを模索しており、またアセリアもその返答を待つ。
やがて御簾の向こうから声が聞こえてくる。
「宰相が言うことは尤もであると考えます」
「なっ!?」
さすがのアセリアもその返答は予想外だったのか思わず声を上げてしまう。
「昨今の情勢よりネオラントからの侵攻が来る……というのは考えにくいものですがしかし同時に情報局という脅威がミストレアにも及んでいることは事実。これは二世界間でも抱えるべき問題として事に及ぶ必要もありますがまずは地盤を固める意味合いでも民たちへの自衛の手段を与えるという意味合いでも宰相の案には賛同致します」
「お、お待ちください！女王陛下！」
堪らず女王の言葉を遮るようにアセリアは待ったをかける。
「お言葉ですがいくら自衛を目的としても既に国民への負担は限界を超えているのです！そこに更に負担を強いるような政策を行えば不満が増すばかりです！民たちを守るためという事でしたら我々王国守護騎士団と王国魔法師団が……」
「脅威は情報局だけとは限らないのですよ？アセリア」

「……っっ!!」

女王の言葉に誠実な騎士は言葉に詰まってしまう。

「依然、虹災の脅威は残っており、未だにこの問題も解決への糸口は見つからず起きてから事に当たると後手に回る形…その被害は近年では増えていると聞きます。さらにはこの情勢に乗じて我が国へと攻め入ろうとする同盟外国の存在も聞いております。これらを並行して対処は可能ですか?」

「そ、それは……」

それ以上の言葉が出ないのか誠実な騎士は俯いてしまう。

現状、王国守護騎士団と魔法師団のほとんどは暴動の鎮圧とダストの討伐に駆り出されている。

そこに今後は貴族に対しての規制まで取り締まろうとすると人員のほぼ全てがそこにあてられることとなる。

そうなればもしそこにキルシュバウム王国に攻め入る国が出れば手薄な状態となった体制ではひとたまりもないだろう。

「さらには報告には人型のダストの存在も確認されたそうですね? 知性も備わっていると。もしそうならば今までは無秩序な虹災も統一性が生まれ、今後はより苦戦を強いられることも多くなるでしょう」

「……」

アセリアはかつて対峙した人型のダスト、クリムを想起する。

明らかに人とはかけ離れた造形に向けられる悪意。

あれがもしも軍単位で攻め入ろうものならそれこそひとたまりもない。

「王国守護騎士団と魔法師団の実力は疑いようもありません。しかしその守れる範囲も限りがあるのも避けようのない事実でしょう。その穴を埋めるためにも宰相はそこまで考えての発言であったと私は思います」

「……ですが」

「無論、民たちへの強制労働や過酷な環境下での訓練は私も承服致しかねます。あくまで人道的な範囲のものに留まり施行する必要性が出てくることでしょう。その点の課題は次の四賢人会議にて議論致しましょう」

御簾の向こうから優美な微笑みを覗かせる。

それを見てアセリアもまた忠誠の儀を行うことで返事をする。

「分かっているわよ。アセリア。私のことを気にかけてくれているのでしょう？この政策を私から国民へ声明を出せば国民の不満が私に集中すると……」

「そ、それは…」

目をそらす行動にくすりと笑う。

「昔から嘘は得意ではなかったわね。大丈夫よ。どんなことがあってもアセリアが私を守ってくれるのでしょう？」

「……！」

その御簾の向こうではどのような表情を浮かべているのかは誠実な騎士の方からは分からない。

だが、そこには幼き頃から心を通じ合わせたふたりだけが知る繋がり――確信に近いものを感じ取っていた。

「……ハッ。このアセリア。命を賭して女王陛下をお守りすると誓います」

それは女王と騎士の間にある忠義ではなく。

ふたりのみが知る幼き頃からの誓いで――。

～Ｓｙｍｐｔｏｍ～　揺れる水面　その３

３３

別室にて。
「アルドルフさん」
紫髪の紳士な宰相に声を掛ける緑の軍師。
「おやこれはカロル殿。いかがいたしましたかな？」
声を掛けられた宰相もいつもの飄々とした態度にどこか余裕ある笑みを浮かべ――。
「……先ほどの立案は少々早計が過ぎるかと」
しかし、常に変わり続ける戦場の下で培われた人心を読むかの如き慧眼の持ち主である緑の軍師の前ではそれが虚勢のものであることなどひと目見ただけで看破してしまうのであった。
「……やはりカロル殿には敵いませんな」

ここで己の虚勢を張り続けても無意味であると悟った紳士な宰相はため息をつくとやや疲れたような表情を浮かべながら設えられている椅子に腰掛ける。

「……確かに先ほどの施策案に関しては我ながら性急が過ぎた。そこは認めよう。だが…」

と、そこで言葉に詰まる。

それを百戦錬磨の軍師が見逃すはずもなく。

「一体何をそんなに急いでいるのです?」

その指摘によりいつもは泰然自若とする姿勢を貫くアルドルフの表情に動揺が走ったことをカロルは見抜いた。

「……カロル殿の目には私はそんなに余裕が無いように見えますかな?」

自嘲気味に笑みを浮かべる紳士な宰相。

「誰が見ても今の貴方から余裕などあるように見えないのは明らかでしょうね」

緑の軍師の指摘にはアルドルフも力無く笑うだけで特に言い返すようなことはしなかった。

「…貴方もここ最近は町民たちが起こす諍いへの弾圧に追われるばかりで碌に休められてはいないのでは?民たちへの過重労働を課すために自分が率先してその見本となるべく実行に移しているのでしたらさぞ立派な試みではあると思われますがそれで貴

方が倒れられてはそれこそ立つ瀬がないというものでしょう。アセリアさんの反対を押し切ってまで徴兵制度を通したいのであればまずは自身のことを省みては？」

「……返す言葉もありませんな」

まるで出来の悪い子どもを教え諭すかのような物言いにさしもの宰相も精いっぱいの空元気を見せることだけが唯一彼の自尊心を保つための抵抗であった。

そのまま視線を窓の方、バウム王国の空へと向ける。

そこではミストレアの純粋なマナを含有した空気が鳥を運び、そのまま緑豊かな森の木々へと降り立っていく。

そこでは生命の循環を巡らすためにミストレアの厳しくも美しい自然の営みが繰り広げられている。

風光明媚なその光景はまさに調律の取れた自然が生み出した芸術作品そのものとも言え――。

そのすぐ側の町ではそれをいつ脅かしてもおかしくない喧騒が飛び交う光景が。

今は個々人小規模な集団であるために対処はできているがいずれその波が大きく波打つことになれば調律の取れたミストレアの自然もたちまち飲み込まれていくだろう。

壊すのは簡単でも元に戻すのは一筋縄にはいかない。

全てが手遅れとなるために――誰かが動き出さなくてはならないのだ。

そう、誰かが。

「……それでも私は守ってみせるさ……国を……バウムの民たちを……」

まるで正反対なその動機に駆り出されるかのように己の信念を完遂せんとする気迫を放ち始めるアルドルフ。

それは正義によるものなのか、はたまたは――。

「そうそう」

と。

そんな彼の覚悟に水を差すような形で緑の軍師は声を掛ける。

「先程、私の密偵の者から聞いたのですがどうやら現在、城下町の方に彼ら一行が訪れたみたいで」

その言葉にピクッ、と反応するアルドルフ。

「ですがこのまますぐにバウム王国を離れるようですね。せっかくですしひと目会っておきたかったものですが今はこのご時世ですからね。それに彼らは今この国にとっても極めて微妙な立ち位置にいますから。ここはすぐにこの国を出てもらうのが彼らの安全のためにもなりますかね」

カロルの言葉を受けて紳士な宰相は。

「……そう、ですな」

その視線は窓の外へと向けられたまま。
「巻き込まれなくて本当によかった」
独りごちる。
その表情に、いつもの笑みはなく――。